儘討ち亡ぼすべき體なれば、義宣北國を經て秋田に赴けり。水戸の城をうばひとれとて、本多正信等向ひける時、車野組に付けし士六人と倶に物具し、新羅三郎より傳へたる城を人に授けん事こそ口惜しけれ。我れとおもはん人々は城を枕に死れやと呼ばはり、城中にかけ入りしを、大手にて本多等大軍にておしつゝみ、生け捕りて磔にかけ、火の車の指物をくゝり添へけるを、東照宮聞し召し武家の道を知りたる者を空しく殺しけるよと歎かせ給ひけり。

〔駿府にて、東照宮御物語の序に、篤實なる人は世に稀なり。われ年老いぬれども多くは見ず。佐竹義宣其の人なりと仰せられしを、永井右近大夫直勝承りていかなる故にやと申すを聞し召し、石田治部と七人の大名と大阪にて諍論の時、義宣と三成ともとよりしたしみありし故、三成を打ち具し伏見に來り、其の後三成佐和山に歸る時、七人の面々道にて附ち取るべしといふよしを聞き、三河守を添へたりしに、義宣三成を討たせては生きがひなしとて道々にもの聞を出だし、其の身は物具して、告げ來るを待ちて打ち出でんと用意ありしと聞く。是れ篤實にあらずや。關ヶ原の亂の時も、大阪より賴みたるゆゑ、吾れに其のよしを告げて何方にも組みせざりき。逆亂に與したるにはあらざれども、捨て置き難くて先祖より巳來の國を削りたりき。篤實のよき事いふに及ばずといへども、國の存亡にかゝるべき事には、又一思慮有るべき事にやとぞ仰せられける。〕

三四九　杉原常陸智勇の事

上杉家の士大將杉原常陸は智男備はりたる人なり。東照宮宇都の小山より引き返させ給ふ時、上杉家の軍兵ども大にいさみあへりしに、杉原獨眉をひそめて、大敵に恐れて引き返したりとおもへるは、其の人を知らざる闇なり。徳川殿踏將を率ゐ先づ上方に攻め上り、石田を討たれんに、十に八九石田敗北すべし。其の時殿一人にていかに徳川殿に打ち勝ち給ふべき。敵國に攻め入らずして引き返したるは味方の不幸なりとぞ云ひける。

〔杉原白石の城を守りしに、いづれの時の事にや、伊達政宗不意に押し寄する事あり。政宗の物見の士はせ歸り、敵はしづまり返りて、唯町家に火の用心嚴しく呼ばはり候ふ。物具したる武者杉原かとおぼしくて城門を開かせ、將机にかゝりて待ち居たるといひければ、政宗謀有らんと恐れて引き返されけり。〕

三五〇　前田慶次が事

前田慶次利大忽々齋と號す、加賀利長と從弟なり。

〔一說に利大は、瀧川儀太夫が妻懷胎にて離別し、利家の兄藏人に嫁して、前田家に生るといへり。〕

前田の家を立ち去りて、

〔利大は文學を嗜みさまざま藝にも達せり。滑稽にして世を玩び、人を輕んじける故、利家數訓せらるゝ事度々に及べり。利大大息ついでたとへ萬戶侯たりとも、心にまかせぬ事あれば匹夫に同じ。出奔せんと獨言せしが、ある時利家に茶奉るべきよしいひしかば、悅びて慶次が許に來られしに、慶次水風呂に水を十分にたゝへてかくし置き、湯風呂の候ふ入り給はんやと横山山城守長和をもていへば、利家何の心もなくふろにゆかれしに寒水をたゝへたり。利家馬鹿者に欺かれしよ、[illegible]來れといはれしに、慶次松風といふ逸物の馬を裏門に引き立てさせて置きたりしに打ち乘り出奔しけるとぞ。慶次自ら湯を試みてよく候ふよ[illegible]

又京にて夏の比馬を川入にやりけり。馬取の腰に烏帽子を付けさせたり。道にて往來の人立ちと

まり、ふとくたくましき馬なれば、誰れの馬に候ふと問ふ。則ち烏帽子を者足拍子をふみて、此の鹿毛と申すはあかいちよつかい皮ばかま、茨がくれ、鐵甲、鶏のとつさか、立烏帽子、前田慶次が馬にて候ぶと、幸若の舞を謡ひて引き通る。見る人の問ひし度ごとにかくしけるとなり。〕

上杉景勝に仕へけり。

初めて目見する時、土大根三本臺に居ゑて出だしけり。

朱柄の鎗を持たせしかば何ゆゑぞと咎むるに、父祖より持ち來りきといふ。水野藤兵衞・韮垣理右衞門・宇佐美彌五右衞門・藤田森右衞門年久しく朱柄の鎗持たせん事を望み申せども許されず。然るに慶次を制禁なくば、四人共に許され候へと訟へて許されけり。直江山形に攻め入り引き返す時、最上義光大軍にて追ひかけ、洲川にて軍ありしに、義光旗本をひいて切つてかゝり、合戰數刻に及びけるに上杉勢引き取り兼ねしかば、直江怒つて、われ大將として此の日に向ひ、おくれをとる事口惜しきよとても怒りけるに、慶次馬の前に立ちふきがり、爰はわれにまかせされ候へといひすてて、敵味方にらみ合ひたる處に馬を乘りかけたり。杉原常陸は先陣にありて種ヶ島の鐵砲を下知しけるが、慶次におり立つてかゝれといへば馬より飛び下りたり。慶次其の日の出でたちは、黑き物具に猩々緋の

羽織を著、金のいら高の珠數のふさに、金の瓢箪付けたるを襟にかけ、山伏頭巾にて十文字の鎗を持ち、黒の馬に金の山伏頭巾かぶらせ唐鍬かけたり。前田慶次と名乗つてかゝりける處に、水野・韮塚・宇佐美・藤田四人も同じく鎗をひつ提げ、をめきさけんで危なく敵を突き退けたるに、杉原種ヶ島鐵砲二百挺小高き所へおしあげうたせし故、物わかれせしかば、慶次下知して引き取りけり。

〔慶治指物れりに大ぶへん者と書きたりしに、人々あまりの事よといへば、慶次汝たちは武邊とよみたるや、われ落ちぶれて貧しければ、大不辨者といふ事なりと戯れしとかや。〕

上杉家祿知削られし後、士多く暇を取りて立ち去りけるに、慶次を七八千石一萬石を以て招く大名あり。慶次われ此の度の亂に諸大名表裡の心見限りたり。景勝ならでわが主君とすべき人なし。扶持し置きてたまはれとて五百石の祿にて民間に引き込み、風月を樂しみ歌學に心を寄せ、源氏物語を講じて世を終れり。

三五一　出羽國長谷堂合戰上泉主水討死の事

上泉主水憲元は甲斐の武家にて劍術の上手上泉伊勢が弟なり。ほまれありし者なるが、京の相國寺の

内に落ちぶれ身を寄せ居しを、秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが、傳へ聞きて對面し、さまざま上泉をもてなし、會津は遠國なれど、景勝三千石の祿まゐらせんとなりといへば、上泉かゝる身に思ひもよらぬ詞を承るとて仕へけり。直江出羽に押し入る時上泉も三千五百石の將たり。最上方には山の上より幡屋まで、二十四ヶ所に出城を設けたるに、直江は眞直に山形にすゝんで攻めとらんと謀りける所に、幡屋より春日右衞門にしたしみある者の、かへり忠せん事をいひおくる。直江悦んで山形に進む兵を押し止め、山路にかゝり幡屋によせんとす。軍奉行杉原常陸春日右衞門が一陣を以て幡屋にすゝめ、惣軍は山形に攻め入りて然るべからん、敵我れに利をあたへ嶮岨にそびき入れ、其のひまに山形の要害を能くせん謀なりといへども、直江もとより杉原と中よからざれば、我は唯易きに就かんとて聞き入れず。やがて幡屋を取り圍み一時攻に乘り破りけり。

〔一説に、長谷堂より内通の事をいひ送りければ、直江大に悦びけるを、杉原是れは赤松圓心が白旗の城にて、新田左中將を欺きたりし謀なり。かくいうて山形の要害をかまへん謀なり、只山形に攻め入るに如かじといへ共、用ゐずして長谷堂に押し寄せけるに、内通の事はいつはりなりし故、直江欺かれたりといへり。〕

それより出城を只一日の中に二十一ヶ所攻め落し、さらば山形に押し寄せんといふ。上泉が曰はく、山形は勝れて要害よく西南は沼なり、東北は石壁高く柵の木七重有り。矢倉二十餘所にかまへ、且つ義光は先祖より數百年此の地にあり、士卒に物なれたる者多し。力攻には思ひもよらず。所々の小城數多攻め取りたるにて勇氣を示し、軍を返されん事然るべしと申す。直江あざ笑ひ軍を出だししは山形を攻めんためなり。今更山形の要害よければとて引き退く樣やある。汝は淺黃じなへの差物さして利根川・二本木の先陣せられしによりて、關東にてそれを憚りて淺黃じなへを指すものなしと聞きたりしにも、覺えぬ事をいふと罵りければ、上泉口惜しき事なりと思ひけり。直江は進んで菅澤山に陣したり。此の處も長谷堂より十九町なり。義光も二萬餘の兵をひきゐ山形を出でて、長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣す。長谷堂には山形の加勢も來り要害よければ、容易く攻めがたし。討つて出でての軍は危しと制しけるに、大風右衛門二百計にて切つて出で上泉が陣へ向ふ。上泉大勢にて押しつゝみあまさじと戰ひけるが、大風頓に打ちなされ切りぬけて城に入りぬ。伊達政宗も軍を出だし、先陣長谷堂の城下に押し來り陣を取りたり。直江は大風を討ち得ざる事殘り多し、此の城を唯一時に打ち破れと下知し城際に攻め寄せたり。直江高き所に打ち上り、石火矢を隙間もなく打ち懸けたるに、只千雷

の落ちかゝるが如し。志村伊豆・鮭延越前こゝを專途と追ひ出だしおひ込まれ、相戰うて其の日も戰ひ暮らしけり。直江又三千餘を城の後の山に上らせ、鐵砲を打ちかくれば、城よりも切つて出で死傷數をしらず。直江軍兵を分かちて四方を燒働す。所々に軍あり。長谷堂の城下に大なる池谷を堰にして、氷をせき湛へたると覺しければ、物見の兵を遣はし、又一陣を以て燒きはたらきす。城中よりひた兜八百計切つて出でしかば、直江使を以て引き取れと下知すれども、にらみ合ひて引き退がらず。使も行きとゞまりて歸らざれば、次第に軍兵行き重り鐵砲を打ち合ひければ、直江、杉原にとく軍を引き上げられよと云ふ。上泉我れこそ行かめといへば、杉原進むは年若き人の業引き揚ぐるは老年の我れに協ひたりとて同心せざるに、上泉存ずる仔細の候ふといひもあへず馬を乘り出だしければ、組に付けられし大高七左衛門、馬を乘り付け上泉を引きとゞめ、士大將の只一騎にてかけ出づるやうやある。有るべくもなしといへども、耳にも聞き入れざれば大高もつゞいたり。前田慶次・宇佐美民部上泉が陣に行き、一陣の大將敵に乘り入るをよそにひかへたるは士の本意にあらず。いざかゝられよといへども、進む氣色の見えざれば、前田をはじめ二十騎ばかり駈け向ふ。上泉・大高は馬よりおり立ち面もふらず鎗を打ち入れ突き合ひたるが、餘なる敵を突き退け引き取らんとする所に、政宗の兵

三百計横あひより切つて懸かりければ、上泉兼ねて直江が詞を怒りたりし故に、一足も引くまじと思ひ定めたれば、又合戰を始め火出づる計に戰ひけるが、敵味方討たるゝ者多し。前田・宇佐美を始め大剛の者共、數度切つてかゝりしかば、政宗の兵三十餘人討たれたり。かゝる處に政宗の士大將石川彌兵衞崩るゝ味方をもり返し、又打つてかゝる。前田巳下立ちこたへかゝつ返しつ散々に戰ひけり。直江日も暮れかゝり進みがたし。とく引きとれと下知しければ、上泉心得候ふといひ捨てゝ敵に向ひ上泉主水といふ剛の者、打ち取り候へと名乘りかけ、死狂ひに數十人切り伏せ、終にそこにて討死しけるを、首をば金原加兵衞取りたりけり。上泉三十四歲とかや。上泉主水と兜の眞向に象嵌にぞしたりける。是れより上杉勢亂れ立つて敗北すれば、義光・政宗勝に乘り餘すなと追つつむる。芋川縫殿・村上國淸四千計横合よりかゝらんと、陣を整へひかへたるを見てふみとまりければ、又取つて返し追つ立て、それより物わかれす。石坂與五郞・蓼沼日向・前田慶次・宇佐美父子物具に立つ所の節各々七つ八つ折りかけ、鎗は突きゆがめ刀は双さゝらの如く斬りなし、人馬共朱にそみたるが、上泉が組の控へたる前を乘り通るとて、各々大將主水をすて殺しなのこの交りはなるべからず。大高七右衞門のみ士なりと罵りて打ち過ぐるに、答ふる人なかりけり。

三五二　伊達上杉陸奥國松川合戰の事
附永井善左衞門岡野左內が事

慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬り取らんと、百姓を間者にしておこたりを伺はれたり。松川は阿武隈川の枝川にて伊達領の境なれば、本條出羽守・甘粕備後・岩井備中・杉原常陸・栗生美濃・岡野左內五千計にて守りけり。政宗は國見峠を踰え、信夫郡より瀨の上の川を渉り、五千の兵にて梁川の城を抑へ、松川をさして押し寄する。物聞ども斯くと告ぐれば、本條出羽城を出で川を渡してや戰ふ、川を前にして半途をや打たんといふ處に、松木內匠敵不意の利を謀りて押し寄せ候ふに、味方川を渡りて待ちかけなば、政宗思ひしにたがひて必ず引き退くべきなり。川を渉らんこそよかりなめといふに、栗生同心せず。此の川中窪にて極めて渡す事たやすからず。政宗わたらん處を半途を打つに利あらん。岡野いやいや敵大軍なり、爰に待たんは敵を恐るゝに似たり、勇士の志にあらず、とく川を渡して待ち設けせんと云ふ。栗生孫子に以レ少合レ衆是曰レ北といふ事あり。小勢にて無謀の軍せんは、大敵の擒とならんは必定なりといふ處に、甘粕備後・杉原常陸も馳せ來り、まづ物見を出だせ

とて、猪俣主膳・本庄段右衞門・井筒小隼人乘り行きて馳せ歸る。猪俣は政宗川を涉らじといふ。二人は政宗川を渡さん事半時計もやあらんといふ。仔細を問ふに、猪俣敵馬の沓を取らず、障泥をはづさず、羽壺を常の如く附けたりといふ。井筒・本條が云はく、我等見し所も同じく候ふ。されども政宗未だ來らず。其の間五六町計も候はん。政宗川際に押し寄せて、其の支度せんに何の時刻を移すべき。且つ小荷駄を遠く引き退けたれば戰を持ちたる敵なり。政宗二萬の軍兵を帥ゐて寄せ來り、空しく引き返すやうや候ふといふ。さらば川端二町計置きて陣を整へて、敵を待たんといふ所に、岡野は切支丹を信ずる人なるが、南蠻人の贈りける角榮螺といふ兜を著眞先かけて川を打ち涉す。栗生・甘粕川を渡るべからずと下知すれ共、布施次郎左衞門・北川圖書・小田切所左衞門等二十騎計、眞しぐらに川に乘り入れ打ち渡す。宇佐美民部鎗を橫たへ殘る兵をば押しとめてけり。かゝれば政宗押し來り、先陣片倉小十郎透間もなく切つてかゝる。岡野四百計眞丸になりて鎗を打ち入れ、面もふらずをめきさけんで戰ひけれども、大軍に取りかこまれ左內僅に打ちなされ切りぬけて引き退く。北川圖書の首を立て直し小田切に向つて、唯今討死せん。會津に殘し候ふ十四歲なる吾が子を賴み申すよ。是れをかたみに贈りてたまはり候へとて、猩々緋の羽織を脫いで小田切に渡しければ、小田切若し萬死

に一生を得候ふならばたしかに贈り候ふべしとて羽織を腰にはさみけり。北川今は思ひ置く事なしとて、追ひくる敵の中にかけ入りて切り死にしたりけり。是をはじめと返してし合はせ、火を散らして戰ひけるが討たるる者多し。政宗勇み進んで追つかけられしに、岡野猩々緋の羽織著て鹿毛なる馬に乘り、支へ戰ひけるを、政宗馬をかけ寄せ二刀切る。岡野ふり顧みて政宗の兜の眞向より、鞍の前輪をかけて切り付け、かへす太刀に兜のしころを半かけて斫りはらふ。政宗刀を打ち折りてければ、岡野すかさず右の膝口に切り付けたり。政宗の馬飛び退きてければ、岡野、政宗の物具以の外見苦しかりし故、大將とは思ひもよらず續いて追つ詰めざりしが、後ちに政宗なりと聞きて、今一刀にて討ち取るべきにとて大に悔みけるとなり。岡野は川へ乘り入れたるに、政宗又十騎計にて追つかけ來り、きたなし返せと呼ばはりければ、岡野ふりかへりて、眼の明きたる剛の者は多勢の中へかへさぬものぞといひて岸に馬を乘り上げたり。宇佐美兵左衞門十六歲松川の向ひの岸にて危く見えしかば、父の民部馬を川に打ち入れたり。栗生いかに先には川を涉る者を止められしが、何事に渡され候ふや。名將の宇佐美駿河守の子息にはいかにと問ふ。民部謀も心より出で候ふ。あれ見られよ、一子の兵左衞門向の岸にてはやうたれぬべく見ゆれば、心の亂れたるぞやといひも終らず、川を涉り打ち連れて

引き返す。栗生は陣を整へて待ちかけたれば、片倉が軍兵を追つ崩し川に追ひ浸す。[illegible]大軍見る内に重り攻め寄せしかば、上杉勢は福島をさして引き退く。（福島に至つて行程なかば十六里なりといへり）政宗いづくまでもあますなと馬煙を立てて追ひかけしかば、物具を道に捨つる事数をしらず、息きれて行き倒るる者もあり。持鎗の長き柄は、もち堪へがたくて多くは捨てけるとぞ。[illegible]

永井善左衛門は世々徳川家に仕へけり。小田原の城を囲まれし後、いかなる故にか有りけん、蒲生氏郷に仕へ、其の後上杉家に奉公しけり。すぐれたる剛の者にて、奥州福島口にても物見に只一騎出でたりしに、伊達政宗の伏兵六人起りて取り包みしを四人討ち取つたり。長篠にても太刀にて打ち落して首を取りたるが、右の指に手負ひ刀を取り落ししを、取りたる敵を追つ詰めて又討ち取りたるほどの物師なり。[illegible]の後其の疵を問へば、馬下くはれたりと答へしとぞ。かくの如く功はほこらぬ人なり。後御旗本に帰り仕へて御旗を司りき。善左衛門浪人にて上州深谷に閑居してありける時、人のあたへし瀬戸の茶入を秘蔵せしに、下女取り落して打ち破りぬ。下女驚きてわ[illegible]が鏡臺より五倍子を入れたる壷を取り出だし、是れにてもかはりに奉らんといふ。用にも立たぬ物なれども、是れを請取り置きぬ。後に小堀遠江守見て手を打ちて、是れは唐物の肩衝なりと賞

美し、後に公に奉りしとなん。板倉勝重懇なりしかば将軍家に御ことわりを申さん。御上京のをり京へ来られよといひ越されしかば、深谷を出でて平安に赴く時、浪人をともなひけり。名護屋に親族ありて立ち寄りける隙に、倶なひける浪人己が刀を永井が指替の刀に取り替へてかけ落しぬ。永井せんかたなく、京に着きて後ち死罪の者有りけるに試みんとて刃を付けさするに、さびて金色も見えわかず。研師刃を付けて此の刀の如き刀の刃曾て心に覚えずといふ。斬罪の場にてふち身の者有りて切れざりしに、かの永井が錆刀にて切りたりしに、物に障る事なきに似たり。能く研ぎて見ればすぐれたる物にて、銘は正宗と切りたり。本阿彌に見すれば、正宗の中にも殊に最上の物なりといへり。是れも将軍家に奉りて永井正宗と號せられきとなり。」

青木新兵衛・永井善左衛門を始として大剛の者ども馬を返しては追ひちらし、とつて返しては突きはらひ後殿しけり。青木は小丈なる馬に乗り柄の短き鎗なりし故、殊に乗り下り幾度となく支へ戦ひけり。甘粕備後は上杉家にて勝れし勇将なるが、白石の城を守りしに会津に行きたりし跡にて、登坂逆心して白石を敵に取られし事を口惜しく思ひしかば、今日とりわきて引きさがり取つてかへして追ひ退け勇気をあらはしけり。福島の城下の川を渡る時、政宗の兵彌々追つ詰めて、われ先にと川に[illegible]

ち入りたるが、永井を後より三刀切る。永井度々の戰に戰ひ疲れ、大軍打ち渡す川音にまぎれ此れをしらず。青木は鳥毛の棒の出しにて黑きほろかけたるが、乘り寄せて敵を追っぱらひ、川岸に打ちあがりて永井に斯くといへば、驚きて從者に見すれば、ほろに三刀鞍にも刀の痕あり。永井けふは助けられしとて一禮をぞ述べたりける。小田切も敵に取り圍まれあはや討たれぬと見えしを、青木又かけ寄りて敵を追ひ拂ふ。岡野は旗おし立てて靜に福島の城に入り、甘粕・栗生も引き入りければ、政宗やがて押し寄せたるに、殿の兵共柵を踰えて城に入りたりしに、青木は柵を越えかれて只一騎控へ居たる所に、政宗馬を駈け寄せたり。青木十文字の鎗にて、政宗の兜の立物三日月を突き折りしかば、政宗馬に踏鐙を合はせてかけ通られぬ。青木後に政宗と聞きて、今一鎗にて突き殺すべきに口惜しき事よとぞいひける。かゝる處に簗川の城より須田大炊助長義討つて出で、政宗の兵阿武隈川を前に陣しけるが、此の川奥州第一の大河なれども、須田はよく地の利をしり、兵を二陣にわかち、須田は川上に打ち上りけるを見て、政宗の兵二ッに分れて防がんと色めく所を、一文字に渡して斬りかゝる。敗北しければ物具を始め、多く分捕にせし中にも、伊達家に傳へし纛を、須田宇平次・中村仙右衞門奪ひ取りてけり。須田今年二十三、これより武名殊に世に高く聞えけり。政宗は松川にて後捲に出でた

りと聞き引き退く處を、本庄越前又かけ出でて、川を渡し追ひかけければ政宗敗北し、信夫山に掛かりて引き退く時、景勝後巻に打ち出でて、紺地に日の丸の旗山の上に見えしかば、政宗とる物もとりあへず仙臺に引き返されけり。後に政宗使を以て、攻め取りたる白石の城と纛と取り換へんと云ひ送られしかば、景勝聞きて、白石の城は鋒にて攻めとられ候ふ。纛も亦吾が士卒の骨折りて取り得候へば、重ねて纛をも鋒にて取り返されよと答へられし後、小城一ッ攻め落されしは恥にあらず。昔より名將も城を敵に攻め落されし事なきにあらず。武具を取られし事は弓箭とる身の大なる恥なれば、政宗我れをたばかりて斯く云ひしなりと笑はれけり。台德院殿上杉の館に御出ありし時、かの九曜の纛法華經の纛を廐にうたれきとぞ。其の後政宗岡野に逢ひたりし時、松川の軍の有樣語り出だして、汝が斬りつるはわすれじ物をといはれしかば、岡野大將の刀の跡と存じ候うて、金糸にて縫ひあはせ家の寶とせんと存ずるよしいひて、羽織を政宗に見せければ政宗悅ばる。其の時岡野兜のしころを吹き返しかけて、なぐり切りにしたりきと申しければ、政宗色を變じ物語を止められきとかや。

〔岡野はもと蒲生家の士なりしが上杉家に仕へけり。富有ある人にて儉を好み奢をにくむ。一月の間二三度も金銀を山の如く積みて其の中に臥してなぐさみとしけるを、聞く人そしりあへり。或時

岡野いつもの如く金銀を並べて見居たりしに、近きあたりの士あらそひをし出だし、方人の者どもあまたかけ寄りてさわぎしを、岡野聞くやいなや正宗の刀を提げて走り行き、一日一夜其の家に在りて、事能くとりあつかひて歸りけり。岡野が馬取の下部大板金一枚持ちたりと聞き及び、呼び出して汝が志こそゆゝしけれ。人は貴賤によらず貧しくしては義理のなすべき事も心ばかりにて叶ひがたし。よく心がけたりと云ひて、黄金百兩與へけり。景勝會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を献じ、朋輩の親しみ深き人々には、あまた黄金をわかち送りけり。軍のしたくに人々はひしめきけれども、岡野は猿樂に舞ひをざれとてさわがず。人々に語りて、日比は武備におこたらず、猿樂でも世のゆたかなる時は、諸方にまねかれて暇なし。今人々あわてさわいで、かの者どもいとまあれば、玩びにまねきたるよ、軍に臨む者生きて歸らんと思はず。されば今生の樂しみと思ひてなぐさみ候ふとぞ云ひける。又政宗福島の城を攻めとらんとて、木幡四郎左衛門百騎計にて城近く働きけり。岡野井樓より見、大物見なれども三陣に分れたるは耳を心懸けたり兵を出だすべからずといひけるに、鈴木彦九郎よせ來りし中に政宗有るべし、くびとめて討ち取らんといへば、尤もなりとて兵を出だし、先陣廿騎計次の陣に一つにならんと色めく所を、鐵砲を打ちかけ、櫓の下より左内一文字に切つて掛かり、遂に木幡を討ち取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名をあたへられし例により、左内を越後と更められけり。政宗三萬石にてまねかれしかども、舊主の好わすれがたしとて、蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に在り。下野守忠郷の時死しけるが、金子三千兩・正宗の刀を遺物に献じ、忠郷の弟中務にも、金子三千兩・景光の刀・貞宗の小脇指をかたみにまゐらせけり。年頃人にかしける金銀の手形證書の大いなる箱にありしを皆焚きすてたりきとぞ。」

三五三 石田が子の僧助命の事

關ヶ原の亂治まりて後、東照宮本多正信を召して、石田が子妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを、寺中一同して重罪の人の子なれども幼き時より出家したる者なれば、赦され候へといふはいかにと仰せありければ、正信とくにも御赦されの有るべき事に候ふ。治部は德川の家に大功をなしたる者なり。治部よしなき軍を起し、西國・中國の大名をかたらひ候ひしに、一戰に打ち負けたる故にこそ、日本六十餘州皆德川家に歸服致し候へ。治部が存じ立ちしよりよく日本は從ひぬれば、德川家に

大功を成したるには候はずやと申しければ、東照宮汝が理屈もさる事なりと仰せられて、かの御ゆるされを蒙りければ、岡部美濃守宣勝組にして、和泉の岸和田に終はりけるとかや。

三五四　越後國一揆堀直寄武功の事　附千利休が事

關ヶ原の亂の時越後に一揆起り、堀左衛門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を攻むる。堀監物が子丹後守直寄坂戸の城にてかくと聞き、後卷にかけ向ふを、敵引きたがへて坂戸を攻めば如何あらんと云ふものあり。直寄いまだ下倉を救はず。敵此の城に攻め來らずば、敵の旗先をだに見ず口惜しかるべし、といふより早く打ち出でて、下倉に向へば、小倉も門を開きて切つて出づ。直寄後より一文字に突き懸かり一揆の長田丸右京を打ち取りたり。此の告を坂戸にて書かする時、勝利を得候ふと書かせしかばいかゞあらんといふ。直寄あざ笑ひ、打ちまけば戰場の土とならんにと云ひて出でられけり。一揆柿崎・齋藤巳下ヵ千計、猶山により前に平田をあてて陣しければ、直寄昔太閤の前に宿老の孫子をよみしが聞きたるに、兵以レ正合以レ奇勝といへり。吾れけふ奇を以て軍すべしとて、山中數馬・速水織部に馬じるしを渡し、直寄は六百計引き分けて林の中に待ち居たり。一揆馬印を見て進み來る時、

林の中よりどつとかけ出で、直寄眞先に進みて、思ひもよらぬ不意を討つ。一揆二百餘討ち取りて切り崩したり。東照宮御感狀を賜はりぬ。此の年二十四歳とかや。○後ちに一萬石を賜はりけり。

〔直寄は秀政の長臣堀監物直政の次男なり。十三歳にて陪臣なれども、太閤の小姓に召し出だされ左右をはなれざる寵臣なり。初三十郎といひけるが後丹後守と稱す。太閤ある時茶室に入りて、火をともし炭を入るる時、千利休が幽靈あらはれ來て、黒き頭巾をかぶり爐のかたへに座し居たるが、眼の中より光生じ息に火を吐く。左右にありける侍女恐れあへるに、太閤炭を入れ終はりて、無禮なりとてはたとにらまれしかば、利休が形退きて坐す。太閤常の居間に出でて、丹後守をよんで怪物數寄屋にあり。しかり來れといはれけり。直寄今年十五歳なり。即ち行く時廊下の窓下みな閉ぢて、さてすき屋に至りて見れども何もなし。歸りて斯くといへば、羽織を與へらる。利休は茶の湯を好みて世に名あり。天正十八年秀吉南禪寺より黒谷へ出でらるゝ山ぎはの道にて、女房の下部にわりご持たせ、山々の花をながめて靜に來りしが、秀吉の先ばらひの者を見て、花の小陰に立ちかくれたるが、いふ計なく美麗なりしを問はるるに、利休が女にて鵙屋に嫁し、今は獨住なる由を聞きて、宮仕へさせよとしひてよび出だされしに、夫に別れし後ち悲しみ

の涙乾かずとて従はず。利休にじひられしに、女を商ひしたりとて人にいはれんが口惜しとて出ださず。秀吉利休をにくまれしに、利休木像を作り大徳寺の山門に置きたり。太閤山門は天子を始として通らせ給ふ頭上にしかする事無禮なり。且つ茶の器の價に就きて私有りと聞くとて、天正十九年二月利休を誅せられけり。利休小座敷に茶の湯をしかけ、弟子の宗巖と常の如く茶の湯終はりて、それぞれに形見をわかちやりて後ち自害しけりとぞ。」

直寄幼少の時、紙でこ・土でこ・ひひな樣の物を玩びて、人の贈るにも他の物は悦ばず。されば人ごとに贈りけるほどに、大なる籠に入れて有りしを、人々あやしみ思ひけるに、常に人なき所にかのでこを並べ、武者押・陣取をして戯れ悦びきとぞ。

三五五　世間太兵衛伏兵を知る事

越後の上杉三條の城に寄せける時、道に伏兵したり。溝口伯耆守宣勝兵を出だして三條に赴くに、世間太兵衛先陣せしが、小川の端に新しき糞の有るを見て、此の邊に兵を伏せ置きたるならんとて搜しければ、伏兵驚きて逃げけるを追つかけて百餘人討ち取りたり。

巻の十七

三五六　眞田昌幸父子三人始末の事

眞田安房守昌幸は海野小太郎幸氏二十一代の末なり。父海野彈正幸隆信州眞田に居て眞田氏と稱す、武田家の臣となる。嫡子源太左衛門信綱は長篠にて討死す。二男は武藤喜兵衛昌幸と云ふ。長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫を申しける。其の一條にて昌幸に兄の家をつがせられけり。父の幸隆後一徳斎と號す。昌幸信玄の近習にて、十八の歳川中島にて鎗を合はせたり。天正十年勝頼諏訪に陣し、四方より敵來りし時、昌幸吾妻の城にこもられよといひけれども、長坂長閑其の謀を用ゐず。勝頼郡内に赴きて死して國亡びぬ。北條氏政兵を出だして甲府を攻め取らんとするとき、昌幸徳川家に屬し、依田信重と碓氷嶺に陣して北條の粮道を塞ぐ。東照宮北條と和平し給ひ、上野の沼田を以て、甲斐の都留信州佐久二郡に換へらるべしと約あり。是れより前昌幸沼田の城を攻め取りて要害の地とせり。眞田に上田を與へ、沼田をば氏政に渡すべき由仰せ出ださる。上田はもとより信玄以來眞田が居所なり、昌幸われ徳川家に功ありと雖ども、僅に上田と沼田を賜はりぬ。賞甚だ薄しと思ひて辭し申しげるは、

沼田は賜はり候ふ地に非ず、吾が鋒にて取り得たれば、故なくて人にあたへん事叶ひ候ふまじと申しけり。豊臣家に屬すべきよしを云ひ送りし其の折から、秀吉東照宮の上京なき事を怒りて是を悦び、密に上杉景勝に眞田に力を合はせよと下知せられしかば、千六百の兵を眞田の許に援とす。東照宮眞田は奸謀ある者なりと、もとより憎ませられける上、無禮の答を怒らせ給ひ、大久保七郎右衛門忠世・鳥居彦右衛門元忠・平岩七之介親吉・柴田七九郎康忠を將として、七千の兵を以て上田を攻めさせらる。昌幸城より一里計隔てたる加賀川を敵渡る時、半渡を打つべしとおもひけるに、甲州の浪人板垣修理たとひ敵の半渡を討つて利ありとも、三遠の物師どもなれば、敵の後陣二の見の勝あらんと云ひければ、昌幸尤もなりとて、城に近き砥石の城に嫡子信之、矢津の砦に矢津但馬をこめ置き、寄手必ず染屋平より寄るべし。よわよわと引き受けて不意に突いて出でんとの謀なり。又城外小野山のかげに郷民を伏せ置きけり。寄手すゝみて町口に押し入り、惣郭の中横小路に柵をくひ違ひにゆひて簾をかけ、其の陰に伏兵を置き、鐵砲を打ちかくる。昌幸思ふ處に引き受け、城門三方より一同に打つて出でたれば、寄手支へ兼れて崩れしかば討たるる者多し。砥石・矢津よりも切つて掛り郷民ももみあひたれば、大久保十四五騎にて踏み止まり戰ひて、加賀川まで引き取りたり。鳥居は高き道を

退きけるを、砥石の兵喰ひ留めんとて慕ひ來れば、五六町計の間に討たるる者數多なり。大久保は鳥居が敗軍を見て、忠世唯一騎引き返す。弟平介忠孝黒き物具に、銀の揚羽の蝶のさし物にて乗り付けて馬より飛び下り、鎗を提げて控へたる處に、敵押し懸かる中にも眞先なる兵を突き伏せたり。忠世が返すを見て松平七郎右衛門をはじめ引き返し來れり。平介は小高き處にふみこたへたれば眞田も進み得ず。其の間僅十間ばかりに過ぎざれども、忠世少しもひるまず、日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす。平介それこそ敵よ三ツ巻を付けざるよと云ひけるに、日置いかゞあやまりけん、味方ぞと心得て、日置五右衛門なりと名乗つて通る處を、足立善一郎政定鎗おつとり鞍の前輪を突く。五郎右衛門が從者鎗を取り直し、善一郎を突く。平介が前を馳せ通らんとすれば、平介復つきけれども、從者鎗を揃へて平介に向ふ。其の間に五右衛門乗り抜けし處を、氣多甚六郎のがさじと追ひさまに股のはづれを突く。其の時五右衛門ふり返り、川中島の加勢を思ひて、危かりしといひてかけ抜けたり。忠世平岩が陣に往きて敵はまばらに追つかけ來たれり。我が跡を詰められなば切つてかゝり候ふべしといへども、親吉敵小勢なれども必定近所に伏兵あるべしとて進まず。其の間に昌平城に引き入りけり。此の日酒井與九郎殿して敵の首を取りければ、其の日の一の功名なり。翌日忠世・康

忠眞田が枝城丸子を攻めんと筑摩川を渡るを、眞田見て海野町へおし出だし、八重原を一騎打に相働く。忠世鳥居・平岩に後を詰めば敵の中を取り切り討ち取るべしといへども同心せず。眞田引き取りたり。味方は八重原に陣し、眞田も城を出でて陣し、足輕軍あり。芝土居をつき柵を結ひ、刈田働きに日を送る。かくて濱松より井伊直政・大須賀康高を始めとして五千餘援兵たり。されども秀吉の下知により、景勝大軍にて眞田の後巻するとの聞え有り。諸將相謀りて陣拂す。昌幸が次男左衛門佐信仍（信仍或本にノブタカと訓ず何れか是なるを知らず）つけ慕はんとす。大返しにかへして軍すべき物色を昌幸見て、信仍を制して追はざりけり。諸將歸陣の後昌幸大息ついて、德川殿は誠の英雄なり。加勢を以て城を攻むる色を變はしたる故、昌幸其の謀に陷り防ぐにのみ心ありて、夜討朝がけの志夢にも無かりしなり。かくたばかりて不意に引き取りたる事、吾が計の及ぶべきにあらずと云ひけり。其の後東照宮大閤と和平なりしかば、景勝の加勢の頼もなく、信州甲州の人々を眞田頼みて、秀吉に申して德川家に歸り屬すべき旨を申せば御許容あり、天正十五年正月七日昌幸信州深志の小笠原右近大夫貞慶と共に駿府に參りて、東照宮に謁し奉る。

〔東照宮も昌幸が武勇侮りがたしと思し召して、嫡子信之を本多忠勝が婿にせんと仰せられしに、

昌幸夫れは聞きあやまちならん。本多が女を信之が妻にせん事、さらに望に候はずと申す。東照宮此の事を大閤に御物語ありしに、忠勝が女を養うて、今はわが女なりといはせられよとはかられしかば、東照宮使を以てしかじかなりと仰せ送られしかば、果して昌幸聞き受けたりと云ふ。」

斯くて北條征伐の事起れり。天正十六年八月北條氏政の使として北條氏規聚樂に參り、氏政上京すべしといへども、上野の沼田は天正十年德川殿と和平の時相渡さるべきを、眞田恣なる事を申して、北條家志を失ひ候ふ。早く安房守に彼の地を北條氏に渡すべき旨を示されなば、氏政上京せんとぞ申しける。秀吉聞き給ひ往年の事詳に知らざる事なり。北條家に土地の事能く知る者を上京せしめよとて氏規に暇給はりぬ。翌年阪部岡越中融成入道江雪大阪に赴きければ、秀吉事の由を聞き給ひ、眞田が上州の内の所領三分の二並に沼田の城を北條に渡し、其の換地には德川家より眞田に與へらるべし、同所三分の一名胡桃城共、眞田已前の如く領すべきよし、江雪に命ぜられけり。かくて眞田が方より沼田を武州鉢形の北條氏邦に渡し、氏邦其の從士猪俣能登範直を沼田の城代とせしに、ゐなか人にて得失の辨なく。名胡桃の城を眞田が領せし事を怒り、たばかつて城を奪ひ取りたり。昌幸太閤に訟へしかば、太閤北條は沼田を得ば上京すべきと約しながら遲緩を怒られし上に、此の事を聞きて氏

政を征伐せんと志決して、天正十八年秀吉師を出だして小田原に打ち向はる。東山道の先陣前田利家碓氷峠に至り、上杉景勝は阪本に至れば、名胡桃を奪ひ取りし猪俣は戰はずして城を捨て逃げ落ちければ、眞田信之豫城に入る事を得たり。昌幸は去る天正十三年以來秀吉の恩顧を得しかば、大谷吉隆に申して、次男信仍を秀吉の許に人質に出だしけり。其の後石田兵を起すの時、眞田父子三人は奥州に打ち向ふ途中に、石田が使來りて秀賴公の爲に旗をあげ候ふ。同心せられば信州に故主君の地甲斐を添へて參らせん、僞なきしるしにとて起請文を送りけり。信幸素より德川氏に二心あればさらば引き返すべしといふ。信之是れは然るべからず内府智勇勝れたる人なり。いかでかたやすく討ち滅ぼさるべき。思ひも寄らざる事なりと諫むれども、信幸聞き入れず。

〔又一說に本多と親しみ厚く候へば、石田にくみしがたき由を信之申ししかば、弟の信仍女房のよしみに引かれ、父に弓引く樣や候ふと申す。又信之西國に與せられなんに必ず軍敗れ候ふべし、其の時父と弟との危難に遇らんを助けて、家の亡びざる樣にせんといひければ、信仍西國の軍敗れなば、父も又信仍も同じく戰場の土とならんに、何として助けさせ給ふべき。德川家先年兵を出だし、上田を攻めし時景勝加勢候ひし、其の報禮なごかなるべき。其の比秀吉公和平を取り行

ひ給ひ武名を世にあげしかば、豐臣家の恩淺しといふべからず。唯疾く石田に同心ありて然るべし。凡そ家の亡ぶべき人の死すべき時に至らば、潔く身を失ひ候ふこそ男士の本意なるべけれ。何條きたなくいのち生きて、家の亡びざるやうにせんといふ事や候ふと爭ひければ、信之怒つて汝が詞無禮なりとて、既に切つて捨つべく見えしかば、信仍いやいや只今爰にて首を刎れられ候ふ事は許されよ。信仍は豐臣家の爲に身を失ひ申さん志なりといへば、信幸聞きて兄弟の爭各〻其の理あり。太閤世を過ぎさせられし後此の事の起れるも、必ず秀賴公の爲にする忠にあらずと信之はおもへるならん。信仍が云ふ處吾が思ふ所なればわれと共に引き返すべし。信之は是れより心任せにせよと別れしといへり。又一說、信幸云ひけるは、會津より宇都宮に至つて七日路なれ共、日の岡の徑より三日の行程なり。景勝と謀を合はせ前後より攻めたらんに、伊豆守假に裏切するならば、德川殿をたやすく討ち取るべしといひけれども、信之内府は勇略百萬の人にもこえたり、味方利あらん事、存じも寄らずとて、遂に兵を引きわけて參りければ、東照宮信之を召して安房守が片手を折りつる心地するよ。軍に勝ちたらば必ず信州を賜はるべき後の證にぞとて御刀の緒のはしを斷ちて賜はりけるといへり。又眞田兄弟の爭の處は佐野の天妙といふ。又犬

伏といふ所なりともいへり。」

昌幸は引き返して、沼田の城にて信之が妻に對面せんと云ひけるに、信之の北の方聞きもあへず、既に父子仇となりて引き別れ給ひしかば、父にておはし候ふとも、城に入れ奉りてま見え申さん事思ひもよらずとて、本丸の門を固めさせ、自ら物具取り出だし女房共皆刀を側に置きたり。人々能く聞き候へ、厩にあしげの馬あるべし、厨の土間につなげとぞ下知せられける。昌幸聞きて吾が過なり。日本一と世に云へる本多中務が女なりけるよ。弓取の妻はかくこそあるべけれ。此の婦人あらんには眞田が家危からずといひけるとぞ。信幸夫れより須河に至り、高間越にかかりて上田にかへりけり。

台德院殿木曾より登らせ給ふ時、御使を以て禍をまぬかるにてこそあれ。降參せよと仰せありしに、信幸聞きて秀頼の爲に城を守り候ふ。攻められば一矢仕らんと答へしかば、又御使にて石田・小西等が己が威權を恣にせんが爲にかゝる企に及べり。豐臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知るべし。猶降參なくば信之に腹切らせ、其の後城を攻め破るべしと仰せ送らせられしに、信幸聞きて太閤恩深き人々の背き候ふは、此の人々心の同じからざる故なり。既に子にて候ふ信之父と相違ひたるにてしろし召さるべし。信之に切腹せられんとや、親の子を愛するは誰れも同じ事に候へども、信之

父とともに城にあらば同じ枕に討死すべし、信之を助くべきにあらずと答へ申ししかば、さらば攻めよとて兵を寄せらる。其の夜は百姓の家に込み入りたりしに、榊原康政眞田今夜必ず討死すべしとて物見を出だし、篝火を隙間なくたかせたり。果して信仍夜討せんと支度したりけれども、康政の設によりて夜討はせざりけり。斯くて明くれば九月六日押し寄せ給ふ。淺見藤兵衛唯一人隍際に進みける處に、打ち懸くる鐵砲に、朱に十二引の差物打ちさかれ、其の身もひしと折り敷き伏して味方の續くを待ちつ。小栗治右衛門大音あげ淺見功名せんとて深入りし、ふかくなせそと呼ばはるを聞き、淺見立ち上り、汝に先をさせんやというて門に付く處に、門を開きて打つて出で、淺見・小栗得たりと鎗を合はせたるに、左右の出屏より鐵砲雨の降るが如し。淺見が從者虎若といふわらは剛の者にて、刀を拔き鎗の穂先をくゞり入りて敵の足を薙ぎ拂ふ。淺見も痛手を負ひ倒れしを、虎若足を取つて引つ提げ持ち歸りけるに、淺見小栗をも助けよといふ。虎若聞きて主人の先途の爲にこそ來たりたれ。他人を何にかせんと云うてかい負うて退く。淺見差物をたゝき落されたりと覺ゆ。取つて來らずば生甲斐なしといふ。虎若逃ぐるとて差物を落さば恥なり。鎗を合はせて落したるは恥に非ずといひて念なく歸りけり。城兵山本淸右衛門・依田兵部堤の上に上るを見て、寄手三十騎計馬を並べてをめいて駈け

よせ、ひしひしと馬より下りて進み行く。齋藤左大夫・山本・依田前につと出でて名乘りけるを見ると均しく、御子神典膳・辻太郎介わたり合ひ入り亂れてたゝかふ。御子神はたぐひなき早わざにて鎗をかざし堤の中にひらりと飛び入る。朝倉藤十郎・中山助六・戸田半平・鎭田市左衛門・太田甚四郎齋藤久左衛門競ひかゝりて鎗を合はす。依田朱塗の物具にて戰ひけるが、深手負ひて倒れしを、御子神・辻・依田を一刀づつ切りたりけり。山本も鎗を打ち折り痛手負ひながら、依田が屍を肩にかけて引き退く。寄手追つむれば城兵切つてかゝるを、中山鎗を合はせ、太田弓にてさし詰め引きつめ射たりしかば、門に追ひ込みたり。

〔太田後善大夫といふ。ある時士一人太田が許に來りて、吾れは眞田家の浪人にて候ふ。上田の軍の時相手に成りたる者なり。其の時射られし矢を携へ來れりと云ひしかば、太田かゝる事は必ず脇に聞く人のたしかなる有りて、證にすべしとてよび入れず。近きあたりに笹瀬左大夫とて武功の有りし人をよびよせて、彼の眞田が士に對面す。其の人申しけるは、上田にて出合ひたりと、善大夫あやしみて一番に出でたるは鬚の多くありし大男なりきといへば、かの士よく見屆けられし、それは戸田荒右衛門と申す者なりと答ふ。其の次の男はふとりたる男といふ。それは何の左仲と申す者なり。さて其次なりといふ。いやいやそれはしかじかの男なりきといへば、それは無極と申す者なり。さて分明に見定められきといふ。さて其の次われなりといへば、太田いかにもしかなりきといへば、其の時この矢にて射られきさて矢を取り出だす。かの者は細野權之介といふ者なり。其の後善大夫申して、細野を尾張の組付にしたりとかや。〕

されども鐵砲をうち出だす事霰の飛ぶがごとく、寄手の先陣地にひしと跪きてけり。本多正信下知して城をば攻めず。昌幸と信仍は中の手に出づるを、牧野右馬允康成・同新次郎忠成はせ向ふ。其の間二町計もあらんに、眞田父子八十四人の手つゞみを打つて高砂の謡をうたふ。榊原にくきやつかなといふまゝに眞先に馬を乘り出だす。其の兵二千計後を取り切らんとすれば、渡邊半藏も鐵砲をうちかけて進みしかば、松澤五右衛門敵の付入心許なく候ふ。とく城に入らばやと諫めて、眞田高砂の謡を終はらずして引き入りけり。康政・康成おし續いて寄せけるを、正信かろがろしう攻めん事然るべからずと制しければ、引き返す。戸田・辻等の七人を上田の七本鎗と世に申すなり。戸田は銀の髑髏のさし物、辻は白き四半に辻といふ字を墨にて書きたり。信仍箭文を射させ二人の武勇を稱しけり。此の中山はきはめたる鎗法の上手なりとかや。

〔後に依田を太刀付けし一二の論あり。辻は依田朱塗の幌當しきといふ。御子神は依田朱塗の兜て幌當はなしといふ。牧野右馬允從者を馬工郎にして上田に遣はし、樣々にして山本にあひ其の時の事を問ふ。山本が曰はく、此の論有るべき事なり。誰人にもせよ幌當をかけずといふ人初太刀なり。依田は幌當かけざりき。せはしき場の鎗下なれば、血に染みたるを朱ぬりの幌當と見たるなるべしと云ひしを聞きて歸り、牧野に語りしかば御子神一の太刀にきはまりけり。〕

かくて力攻めにせられば人死傷せん。早く美濃に赴かせ給ふにしかじかと評定あり。森右近大夫忠政を上田のおさへとし、台德院殿かこみをとかせ給ふ。榊原殿せしに、眞田遙に見て榊原が有樣吾れを侮れり。追ひかけてくひとめ一軍せんと云ひけるに、眞田が許に年老いたる法師武者の謀ゆゝしき有りけるが、康政ほどの者いかで其の謀なからるべき。古の兵法に歸師勿レ逐といふ事の候ふとてとゞめて追はざりけり。東照宮榊原は必ずかゝり引きにすべきものなりと仰せられしが、後に召して御尋あり。榊原承り御大將は城に遠き山にかゝりて引き給へと申ししが、臣は城下を眞直に殿仕りたりと申ししかば、東照宮汝必ずしからんと思ひしに、果してたがはざりけりとぞ仰せられける。

石田軍破れしかば、眞田父子を誅せられん處に、信之此の度父と引き分れて參り候ふは、父を助けん爲

に候ふ。たとへ大國を賜ひ候ふとも何にか仕らん。あはれ信州を以て二人の命にかへ申し渡旨を申されけり。

〔信之、井伊直政・榊原康政に就きて父を助け給はり候へと申す。東照宮聞し召し許容ありしと仰せられければ、台德院殿に申すに、信之父を助けんといふはことわりなり、され共安房守にさへぎられて關ヶ原の軍におくれたり。必ず安房守を誅すべしとて御ゆるされの色なかりしかば、伊豆守是れを承り、又兩人に就きて仰の趣申すべき詞なし。かくあらんと存じ父を諫めしか共、用ゐざれば力に及び候はず。只一ツ志す所の候ふ。安房守を誅せられんより、先にまづかく申す伊豆守に切腹を仰せ出だされ候へかし。御敵の子なれば左あるべきと世の人も存ずべし。必ず父在世の中に伊豆守を誅せられよと云ひも終はらぬに、康政心得て房州御赦免の事は康政が申し上げて事よくせん。むかしの義朝に大に異なる豆州かなといひて、其の旨を申ししかば、東照宮・台德院殿も聞し召し入れられて、眞田父子ゆるされきといへり。〕

信之に信濃十二萬石の地を賜はり、昌幸・信仍は御赦を蒙り、城を出でて、紀州高野の麓九度山に引き籠る。信仍常に父と兵法を談じて天下の時勢を計りけり。昌幸は六十七歳にて九度山に死す。其の

後大坂の亂起りしに秀賴信仍を招かれけり。此の比世の中さわがしかりければ、紀州は淺野長晟の領地なれば、橋本山の百姓に眞田大坂に行く事あらん、おしとめよと下知せられしかば用心嚴しうしたりけり。信仍橋本山の百姓數百人を九度山にまねき、かり家あまた設けて酒宴してもてなし、上戸下戸をいはずしひたりし程に、醉ひ伏して前後もしらず。其の時百姓の乘り來し馬にいろいろの物取り付け、百人計打ち立つて紀伊川を渉り、橋本山より木のめ路にかゝり大坂にぞ行きたりける。道々にて百姓はみな九度山にゆきぬ。殘りし女わらべ共、信仍が鎗眉尖刀の鞘をはづし、鐵砲に火なはをはさみ、もし押し止むる者あらば忽ち殺すべき體を見てせんかたなし。九度山に醉ひ伏したる者共夜明けて見れば眞田はなし。いかにと問へば、昨日しかじかの有樣にて河內路に赴きたりといふ。欺かれしと悔めども力及ばず。信仍大坂に至り只一人大野修理治長が家に行く。信仍其の比薙髮して傳心月叟といひけり。大野が士信仍とはしらず。何國の修驗者ぞと問ふ。信仍大峯より參り候ふといへば、折節修理は居合はせずとて番所のかたへに呼び入れ置きぬ。

〔若き士ども刀劍の物語するとて信仍に向ひ、汝が刀見せられよといへば、山伏の犬おどしに候ふとて出だすを抽きて見れば心も詞も及ばれず。さらば脇差を見んとて是れを見るに、是れも同じ

事なればおどろいて、なかごを見るに脇差は貞宗刀は正宗なり。人々あやしみあへり。其の後ち信仍彼の若き士に逢ひて刀の目きゝはあがりたるやとたはむれしに、みな赤面しきとぞ。〕

修理歸りて信仍を見て大に悦び、とくも參られ候ふよと禮義正しくして書院に招き入れもてなしぬ。秀賴速水甲斐守時之を使として黃金二百枚賜はり、軍兵の事はやがて下知有るべしとなり。既に東西の軍起るに及びて、東照宮いかにもして信仍を降參させばやとて、叔父隱岐守信尹を以て此の旨仰せられ、信州にて一萬石賜はり候ひなんとなり。信仍同心せざれば又信州一國賜はるべしと仰せ出だされけり。信仍怒つて義は人の道なり、秀賴に二心あらん事存じもよらず候ふ。重ねてかゝる使をせられなば存ずる旨ありと罵りて、信尹を追ひ返しけり。

〔或說に、信尹に向ひて天下に天下を添へて賜はるとも、秀賴に背きて不義は仕らじ。汗の出づるとて肌をぬぎ、小姓にぬぐはせて、やがて首を關東の御兩所の前に出だすべきとてうち笑ひゐたりとなり〇元穎按ずるに、昌幸德川家に服從し奉りて後、關ヶ原の亂に及びて背きたる事二度に及べり。此れ義といふべからざるにや。東照宮寬仁におはしませし故に、再犯の罪を宥めさせ給へり。信仍其の寬仁に何を以て報い候ふや心得られず。豐臣家は眞田數世の君に非ず。若し君に背

かず義を論ぜば、武田家亡びて後ち世をすてて山中に隱れずばいかにかあるべき。眞田が論ずる處の義、道に叶へるとはいふべからず。世の人眞田を以て賞稱する事甚し。故に愚論を述ぶるに及べり。」

大阪冬の陣に出丸に有りて防ぎけるが、大敵の攻めし時守固かりけり。和平に及びて信仍越前忠直に仕へし、原隼人貞胤はふりしよしみありて招きもてなしけり。（原は昔武田家の士也）酒盃數獻の後ち信仍鼓をうち子の大介に舞はせて興じけるが、信仍云ひけるは、吾れ必ず討死せん。思ひの外に存へて再會する事よ。されど終には軍に及ぶべし。落ちぶれて九度山にかくれ居しが、一方の大將となりて候ふ豐臣家の恩たとへんやうなし。あれに見ゆる鹿の角の立物の兜は眞田家に傳へたる物とて、父安房守讓り與へて候ふ。重ねての軍には必ずきんずる物なれば、見置きてたまはり候へ。又命はをしからねども大介がおもひ出もなく、空しく戰場の土とならんは不便に候ふと語りければ、貞胤も涙を流し軍に臨む者誰れか生きて歸らんとおもふべきと答へしに、信仍白河原毛なる馬に六連錢を金もてすりたる鞍おかせ、庭にて乘りまはし原に見せて、城は毀たれたれば天王寺口にかけ出て馳せめぐり、下知して思ふ程軍せばやと存ずれば、此の馬のかはゆく候ふと語りて、又酌み醉ひて別れけり。果して和平敗

れしかば、元和元年五月大阪にて軍評定あり。後藤は大和口の先陣にて平野に陣しぬ。五月六日の夜信仍毛利豐前守勝永と、二人打ち連れて後藤が陣に行き、明けなば國分の山を踰え、三萬の軍兵を一陣にして、關東の旗本に一文字にかけ入り、軍神も照覽候へ、兩御所の首をとるか、三人の首を實檢にそなふるか、二の中よとて最期の盃せり。後藤は六日の夜半に打ち出で、道明寺口にて討死なしけり。毛利は藤井寺に陣を進めし處、はや後藤が軍破れ、關東の軍兵二三十萬もあらん、洪水の溢れ來るが如し。眞田は待てどもいまだ來らず。眞田は兄の伊豆守と同心して裏切するよと人々罵りける所に、住吉海道より赤旗おし立て馬煙ふみ立てて來るをみれば、金の蠅捕の馬印にて眞田なれば、毛利が陣もいさみあへり。信仍譽田の方にすゝめば、さてはいよいよ二心よと人々あやしむ所に、信仍堤の上にあがり鐵砲を進めて、伊達政宗の先陣片倉小十郎に向つて討つてかゝる。信仍眞先に進んでたたかひしが片倉が陣敗北す。逃ぐるを追うて敵あまた討ち取りたり。片倉金の鐘の差物にて麾をとりもり返す。政宗の旗本の騎馬の鐵砲もすゝみ來る。奥州は聞ゆる馬多き所なれば、よい馬を選びて若き士に乘せ、馬上より鐵砲を打ちつるべさせ、敵ひるむ所を馬の首を揃へて怒ち破り、追ひかけみだして追つ崩す軍略なり。未だ其の間相去る事遠かりしかば、信仍いざ疲れたるに息をつけ兜を脱げと下

知しければ、みな兜をぬいで休み居たり。敵やゝ近付きしかば信仍さらば兜を著よといふほどこそあれ。兜の緒をしめ鎗の穗先をそろへて敵に向ふ。政宗の鐵砲箕手なりに成つてかゝり來り、雨の降る如く打ちかけたり。信仍眞丸に成りてとてものがれぬ所よ一足も引くなもの共と下知し、ひたひたと跪きて聲々に念佛をとなへ力を合はせてこたへたるに、信仍大音あげ一寸も引くな爰に死れやと下知して鎗を取つてかゝれば、士卒一同に立ち上りをめいて鎗を打ち入れたれば、政宗の軍兵大に破れ一支もなく崩れけり。此れを世に眞田が天王寺口の軍とて、大軍の騎馬鐵砲に打ち勝ちたる有樣をつたへて稱しけり。信仍士卒を立て固めしづしづと毛利が陣に來たる。大介今年十六歳組討して取つたる首を、鞍の四方手に付けて手負ひたるが、流るゝ血をもぬくはず馳せ來るを毛利見て、あはれ父の子なりと感じけり。信仍毛利が手を取り涙を落し、時刻遲く後藤が討死せし故、謀空しく成りぬるも豐臣家の運盡きぬる所なりといへば、毛利今日大敵に打ち勝たれし武勇の有樣、古の名將にもまさりたりとぞ云ひける。かゝる所に秀賴の黄母衣の使番乘り來り、とく城中に引き籠り候へと下知せられしに、信仍は猶赤旗おし立て、今一軍せんと兜の緒をしめ直し、勇氣殊にいかめしく見えたりけり。水野日向守勝成此れを見て、いざ軍せんとて政宗にすゝめらるに同心の色なし。越後少將忠輝こゝに

陣を進められしが、此れも眞田が陣にかゝらんと兜を著給ふ。政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り、日暮に近く軍危からんといへば、はやりをの士どもいざかゝりて討ちとらん、弱敵をあますまじといふに、片倉それはひが事にて候ふ、日本國を敵にて軍する大阪の者共を弱敵といふべきや。片倉が組三十人の中二十九人は討死したり。此れ見られよとてつばまで血に染みたる刀のまがりたるを見せてけり。越後の士大將花井主水もいかゞすべきと、軍奉行玉蟲對馬に問ふ。玉蟲敵は二の身の勝を心がけ候ふ。かゝりて軍に利候ふまじといひてためらひけり。

「忠輝大阪をつくべきやと評定決せず。篠瀨左太夫足輕をかけあしらひてくひとむべし、軍をさせられよとすゝむ。玉蟲僅なる足輕を以ていかにして敵の大軍をくひとむべきといへば、篠瀨ふまへのなき事は申さじ。六尺の大男も足のうらに踏みぬきすれば行歩ひまどろものなり。人數少しとてつけられぬ事やあるといふ。玉蟲地の利しらぬ所にて日もくれたり。ゆきがかりの合戰は危き物なりと押しとゞむ。小野能登守は判官殿の三草山を越えての合戰は、しらぬ國の夜軍ならずやといふ。皆川老甫・小野能登守・花井主水・篠瀨左大夫はかからんといへども、玉蟲對馬・林平之丞はおし留めて論決せざりし中に、大阪方しづしづと引き取りしともいへり。」

眞田の陣には手々に扇をあげて招き、何とて軍し給はぬぞと聲々に呼ばはりけり。猶かゝらざりしかば信仍しづかに兵をおさめ、關東武者百萬もあれ、をのこは一人もなしと大音に罵りて引き取りければ、東照宮玉虫が林道春に吳子が六國の風を說きたる章を讀ましめられ、玉虫を逐ひ出だされけり。此の玉虫は甲斐の武田家にて物したる故軍奉行たりしに、いかなる故ならんおくれたりき。あくる七日の軍に信仍兵を出だししが、秀頼の出馬をすゝめんため、子の大介を城にかへしけり。大介今年十六に及ぶまで片時もかたへを離れ候はず、只今討死の際に逃げたりと人のいはんも口惜しく候ふ。去年母上にわかれ奉りし後、文のたよりにながらへて相見えんはねがはしけれども、合戰の場にて必ず父うへと同じ枕に討死せよ。苟にも名こそをしけれと誡められきといひければ、信仍城中へ歸れといふは秀頼公の御ためなり。父子とてものがるべきや、やがて冥途に逢ふべきを、しばしの別れを惜しむこそ口惜しけれ。とくとく參れとて取りつきたる手を引き放せば、大介名殘をしげに父を見て、さらば冥途にてこそとて引き返す。信仍大介見おくりて落つる涙をおさへ、昨日譽田にて痛手負ひしが、よわる體の見えざるは、よも最後に人に笑はれじ、心安しといひけるとかや。かくて大阪の軍敗れしかば信仍討死しけるを、首をば越前忠直の士西尾仁左衛門取つたりしに、誰れともしらず。眞田信尹馬に乘つて打ち通り、此れを見て其の兜は見知りたるぞ、眞田左衛門佐なるべし。口をひらいて見よ。向齒二枚闕けて有るべきといひしに、信尹が詞の如し。さてこそ左衛門佐とはしりてけれ。彼の兜は原に物語して見せたるなり。弓箭とる身のおもひ出の詞、かねて云ひおくべき事にこそといひあへり。大介は城中に入り秀頼に從ひて、蘆田曲輪の矢倉にこもりて、父の事を尋ねけるに討死せしと聞きてそれより物もいはず、母のかたみに賜はりける水晶の珠數を首にかけ、秀頼の自害を待ち居しかば、速水甲斐守大介に向ひて、組討の武勇たくましきふるまひして、痛手負はれしと聞ゆ。和平にて君も城を出でさせ給ふべし。眞田河内守信吉の方へ人をそへて送るべしといへどもちつとも動かず。寄手矢倉を取り卷きし時、速水戸口に立ち出でて大介が有樣をかたり、武勇の血脈おそろしき者なりと云ひきとなり。終に大介も矢倉の中に死して、父子同じく豐臣家の爲に亡びたり。

三五七　西村孫之進武功の事

大阪夏陣に眞田信仍と伊達家と軍する時、伊達家の騎馬鐵砲をうち立てたれば、玉の飛ぶこと霰の降るが如く、信仍が軍兵ども折りしきて、鎗を敵の方へさし向けこたへ居たるに、西村孫之進といふ

者、うたれたる味方の屍二ツを重ねて盾として居たるに、玉一ツ來て二ツの屍をうち通し、孫之進が肩に傷きたれどもうす手なり。鎗を握りたる左のこぶしの大指こそばゆくて氣味惡しく覺え、殘る指四本にて大指をにぎり込みてこたへたり。全身の危き事はわすれて、大指の先の斯くの如きは怯ちたる故ならんと思ひて、左右を見るに皆しかしたり。又かたへに並び折りしきたる者に玉の中る音甚だ強くひゞきて、我が身に中りたるかと覺えきと、後ちに人に語りけるとぞ。此の時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討ち取りけれども、其の姓名をしらず。落城の後ち孫之進未だいづれの家にも仕へずして、江戸におもむき居たりしが、相知れる者の方へゆきてものがたりする時客來れり。主人西村が事を語りて大阪にて事に逢ひたる物しなりといふ。かの客は伊達家の士海道林左衞門といふ者なるが、誰れの陣にかおはせしと問ふ。西村眞田左右衞門佐が許に有りきと答ふ。客の云はく、さては五月六日の戰にての事なるべし。具に承り候はばやと問ふ。西村聞きてさせる事にても候はねども尋れに就きて申すべし。伊達家と始めての一戰終り、後ちの軍殊の外はげしく、伊達家の陣を七八町計も有らん追つたてたる處に、三十人計取つてかへし折りしかれたり。某とも三人鎗を入れ候ひき。某が鎗の相手の間におし隔たりてかけ入り候ふ人を、初鎗にかたかみの外れを突き損じ、二の鎗に草摺の間を突い

てはれ倒し、首をとらんとせしに歷々の人にてや候ひけん。從者と覺しき者二三十人も取り巻き候うて、手に手に幾刀ともなくきられ候ふ。皆具足の上にて手を負はず候ひしが、鎗にて腰骨をつかれ、倒れて絕え入りそれよりは覺えず候ふ。後ちに承り候へば、眞田が總軍ごつと押しかゝり候ふ故、われらが首をとられず候ふ由、彼の突き伏せたる鎗の相手は定めてたすけのがれたるなるべしと存ずるなり。其の後少し人心地つき候ふに、馬とり彌右衞門と申す者、これほどの手にて弱るといふ事やあると云うて、後の方へ歸る音かすかに耳に入りぬ。見捨てて逃げたるかと思ひしに、又來て腰の手拭を水にひたし、持ち來り口にしぼり入れたりし故、彌々氣付きたるを、彌右衞門肩にかけて城中に歸り、翌日も其の疵故働く事ならず。戰場に出でずして思はざるに存命候ふといへば、彼の客聞きて驚き、初の鎗を合はせ候ふは士大將秋部刑部と申す者なり。其の間にかけ入りたるは刑部が子甚平といふ者なり。御物語りにて疑もなく候。甚平をば陣屋につれ歸りたれども死しぬ。察せられ候ふ通り一陣の大將にて候ふ。其の日武功の證人には我等立つべきにて候ふ。其のしるしをまゐらせんとて、右の次第を書き花押を加へて西村にあたへ、さて譽田以來の參會珍らしき緣なりとて、互に物がたりして別れけり。西村後ちに池田の御家芳烈公光政朝臣に仕へたり。

三五八　佃次郎兵衛伊豫國松前城を守る事

佃次郎兵衛十成は加藤嘉明の左の先手の士大將なり。からしまの船軍に十成敵船に乘り移つる時、敵劍にて口中へ突き入れたれども少しもひるまず、猶飛び込みけるを、棹にて兜の上を強く打たれ海中へ落ち入りたれども、水に長じたれば泳ぎあがるを、從者熊谷覺兵衛薙刀をさし出だすに取りつき、直に敵船に乘り入りて、船中の者どもを撫切にしたりけり。嘉明船あまた乘り取られしば其の一ツなり。關ケ原の時嘉明は伊豫の松前を出で關東に打ち向はれしに、十成に堅固に守れと下知して松前に留守居たり。毛利輝元の兵村上掃部・能島内匠・曾根兵庫・宍戸善右衛門等、松前をとらんと支度しけり。能島・村上は河野の一族なる故、招かざるに人々從ひなん、豫州を攻めとらん事掌に中に有りと評議し、豫州の人平岡善兵衛といへる人を嚮導とし、三千餘をひきゐて豫州に打ち向ひ、使を以てとく城を明け渡されよ。遲くは踏み潰さんと松前へ云ひやりけり。城代加藤内記佃と相謀り、先づ敵をたばかるべしとて子細なく城をあけ渡すべし。然れども妻子をかたつくる間を待たれ候へと返答す。左もありなんと侮りて三津浦に上り、民家に陣して待ち居たり。大洲の城に藤堂高虎ありて、加勢をさし向け

られしかば、松前城中の人々よろこびあへり。十成獨同心せず、今敵大軍にて押し寄せたりといへども、謀を設け一戰して義を守るは弓箭取る者の法なり。城を枕にして討死すべし。勝利を得ば生前の面目なり。たとへ勝ちたりとも人の救によりて運をひらきたりといはれん事口惜しかるべしとて、禮義を正しくして辭したりけり。此の時國中一揆起り、三津浦に酒肴を贈る由を十成聞きて、雙方の勝負を窺ひて見合はせ居たる黑田・大溝・永田等の百姓小ざかしき者四五人呼び寄せ、妻子を質に取り金銀をあたへ、よく云ひふくめ酒肴をもたせ三津浦へ遣はし、嘉明等近年松前を領し、仕置宜しからず百姓ども困めり。河野一族の人々國に入り給はん事、百姓の安堵なりと悅び祝ひ申すなり。城中にゆかりの者候うて具に承り候ふは、嘉明關東へ出陣軍兵を拂つて連れられしゆゑ、今殘りとゞまる者ども多からず。大かた老衰病者にて一人も軍すべきものなし。佃十成も大病なり、鉛藥も乏しく落支度の外なし。はや逃げ去りなんと口々に云はせたれば、安藝の士大將さも有るべしとて彌〻おこたりけり。彼の百姓一人立ち歸つて其の有樣を告げ知らせければ、さらば今夜風雨の紛れに一夜討すべしとて、嘉明の貯へおかれじ白布を胴肩衣に裁ち縫ひて配りあたへ、十成は背に松の字を墨にて書きてしるしとし、合詞を定め首は取るべからず、貝の音を聞かば勝負を止めて引き取れと約束を定め、

慶長五年五月十八日戌の刻に打ち立ちけり。忍の者歸りて今夜は村上が陣所に集まりて酒盛の半なり。桑山の濱邊に張番の足輕松前のおさへに置きたりと告ぐる。十成打ち破りて通らんは安けれども、途中に滯りて三津浦へ聞えなば謀いたづらになるべしとて道を替へ、江月山を越えて子の刻ばかりに三津浦におし寄せ、所々の民家に火をかけて切つて入りしかば、大にさわぎて物音も聞きわかず。十成薙刀を提げ眞先に進みけるに、掃部敵寄せたりとて何程の事かあるべきとてかけ出づるを、夜討の大將佃次郞兵衞なりと名乘つて掃部をつき伏せ、敵あまた切りはらひ、貝を吹き立てて軍兵をまとめ、しづしづと引き取りたり。掃部を始め内匠兵庫も討たれければ、引き退きて久米の郷如來寺に楯籠る。翌十九日十成又おし寄せければ、如來寺にも支へかね道後山に引き退く。十成も深手數多負うて日は暮れぬ。松前に引き取りぬ。道後山の安藝の人々近郷の百姓を相從へ、刈田燒きばたらきして松前の城を攻めんとすると聞えければ、九月廿三日加藤内記道後村へ押し寄せて相戰ふ。十成は久米の戰に手負ひて出でざりしかど、重れて安樂の加勢來らば始終いかでか勝つべき。今急に追つ拂はずば後日の事覺束なし。手疵を痛みて城中に死なんより、敵に向ひ快く討死せんとて、城下の町人近郷の百姓二百人計集めて具足を著せ、妻子を質に取りて幟旗を指させ、十成引き具して道後村にかけ向へば、味方これに力を得、宍戸、平岡に從ひたる一揆ちりぢりになりければ、終に風早の浦より船に乘り藝州に引き退きけり。關ヶ原の後嘉明松前に歸りて戰功を選ばるゝに夜討に首とらざりしかば、十成村上を討ち取つたるは明かなれども其の功をいはず。生捕の者に尋ぬるに、村上が陣へ先だつて切り込んだる人の白き肩衣の背に、松の字を大きく書きたるが、薙刀にて村上を突き伏せしを間近く見たりといひければ、嘉明十成が功によりて松前をとられず。殊に安藝の物主三人を討ち取り、大洲の加勢を辭せし事勇といひ忠といひすぐれたりとて、太閤より賜ひたる物具に感狀を添へて、浮穴郡久萬山の庄六千石を與へられたり。慶長十八年嘉明溫泉郡勝山に城を築き松山と名付け、松山の北に別に一郭をかまへ、五つ矢倉をあげて十成を置かれぬ。元和元年大阪の戰にも十成嘉明の嫡男式部少輔明成に從ひて淀川を渡り、城兵を討ちとりけり。同年十成關東に召され葵の御紋の時服を下されぬ。寛永四年嘉明奥州會津に移りて、十成に一萬石をあたへられけり。寛永十一年十成病おもく子共どもを集め、われ若かりしより戰場に出づる事度々にて、疵を蒙る事十三ヶ所、就中豫州久米の合戰に鐵砲頭の右にあたりて、猶其の鉛皮の中にあり。然れども運盡きざれば死せずして、かく老年に及んで病の爲に死せんと覺ゆるなり、これを以て思ふに、弓箭取る身は少しもきたなびたる志あるべから

す。かたみに是れを殘さんとて剃刀を取りて皮を破り、鉛丸を取り出だして前に置く。三月二日八十二歳にて端座して終はれりとぞ。

三五九　大久保忠佐に三枚橋の城賜ひし事

關ヶ原の亂治まりて後、大久保治右衞門忠佐に二萬石賜ひて三枚橋の城主たりしに、渡邊忠右衞門御近習の人に向ひ、治右衞門を武功の人と思し召しけるが、此の忠右衞門に逢うては逃げたりと申しけるを聞し召し、治右衞門を召され、先年三河にて一向宗一揆の時、忠右衞門兄弟弓を持ち其の餘數多鐵砲を持ちたる者七人に汝一人うち向ひて、相手かけの勝負ならば手なみの程を知らすべきに、多勢の飛道具に吾れ一人かゝりて、犬死すべきにあらずと大音に詞をかけて、引き退きたると聞きたり。然るに渡邊めが如く無理をいふ男には、とりあはずで置くにしかず。必ず此の後も聞かぬ體にてあれとぞ仰せられける。

卷の十八

三六〇　細川幽齋古歌を書きて忠興を諫められし事

細川忠興諸事嚴正に過ぐると父の幽齋に告ぐる者ありければ、忠興の寵臣を呼びて古歌二首書きてあたへらる。

あふ坂の關のあらしの寒けれどゆくへしらればわびつゝぞぬる

此の歌のこゝろを察せよ。

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒もはなれざりけり

此の歌のこゝろをよく思慮せられよと忠興にいへと敎訓せられけり。

〔關のあらしの歌は古今集よみ人しらず、まこもぐさの歌は詞花集俊惠法師のうたなり。〕

三六一　本多忠勝功名を論ぜられし事

或人本多忠勝に思慮ある人功名をとげ候ふか、思慮なき人功名をとげ候ふかと問ふ。思慮なき人も

思慮ある人も功名するなり。思慮ある人の功名は士卒を下知し、大きなる功名をとぐる物なり。思慮なき人は鎗一本の功名なり、大なる事はなしと答へられけり。

三六二　井伊家の附人連署して直政を諫めし事

井伊直政壯年鋭氣甚しかりしかば、東照宮よりつけ置かれし「諸本脱」以下連署して諫書をさゝげたりし、其の中に人には必ず向ふざすと申す事を思ひ設けたるが然るべく候ふ。臣等が前の主君の事を申すも如何なれども、信玄は若き時より一として心より善事はなき人にて候へども、常に越後の謙信を以て向ふざすとして、謙信にまさるべきとつとめはげまれ候ひき。されば信玄一生の間手をおろしたる大事の合戰、五度に及び候へども大なる敗北はせられず候ふ。殿にも本多中務大輔忠勝を以て向ふざすとして、勉めておとらじとはげみ給ひ候へかし。いにしへより進まず退かざる瓦將と申すは中書相かなひ覺えたりと書きたりけり。

三六三　堀秀政を名人太郎といひし事

堀久太郎秀政後ち左衞門督といふ。士より下部に至るまでつかふ。上に下の情をつくすを[illegible]し事ら心がけられたり。かゝれば下に恨むる者なく、奉行の從者と荷を持つ者と輕重を爭ふを聞きて、其の荷物を自らふりかたげ往來し、我が力は彼の者よりまされり。然れども一里ばかり負ひたれば勞れたり。持つ事あたはじといふは尤もなりと決斷せらる。或る時武者押にはたさし後れたりけるを尤めけるが、秀政自ら旗を負ひて試み、さてば吾が乘つたる馬の肝よき故ならんとて、肝よわき馬に乘りたれば旗さし後れざりき。世に名人太郎といひけるは、かく下を使ふに心を用ゐられし故にこそと、人いひあへりけり。小田原陣中に卒せらる。年三十八なりとかや。

三六四　大久保忠隣忠直の事

大久保相摸守忠隣は忠貞の人なり。關ヶ原の時台德院殿木曾路より攻めのぼらせ給ひしに、石田敗北の後御着陣ありしかば、東照宮御對面ましまさず。忠隣近習の士を以て申したき事の候ふと申す。中々口にもいひ出だされずといふを聞きて、さらば直に申さんとて座を立ちけるを、さらば先づ申して見ゐとて、かくと申せば、色を變じて內に入らせ給ひしが、やゝありて相摸は歸りたるかと仰せあり。

猶待ち居て退かんけしきは候はずと申せば、あくまで剛直の者なり、よも空しくは歸らじとて召されけり。忠隣御前に參りて、先づ何とも言ひ出ださで涙を流しければ、それはいかにと仰せある。忠隣此の度上田を攻め候うて道に遲留の候ひき。上田を攻め候ふは忠隣と正信が仕業に候ふ。二人の中一人は召し出だされ罪を糺させ給ふべきにて候ふ。さはなくて不和に及ばせ給ふ事ひが事にてこそ候へ。過ぎし年大軍にて攻めたりし時も、眞田が智勇に挫がれ候ひき。上田固くとも遂に攻め落すべきをすててのぼらせ候ひしに、關ヶ原にて石田今しばし支へなば、など戰功のなかるべきに、石田脆く敗れて手を空しくなし給ひぬ。君萬歲の後ちに日本を治め給ふべき御嗣に、人の侮り奉るべき事をなし給ふは、怒にひかれて忘れさせ給ふにや、とく嗣君に自害をすゝめ奉るべしと申されしに、汝が言無禮なりとて立たせ給ふ所をおし止め、忠隣が申す處理ならば聞し召し入れられよ、正しからずば首を刎ねられ候へと憚る氣色なく申ししかば、聞し召し入れられ、汝がいふ所尤もなりとてやがて御對面おはしましぬ。忠隣は相州小田原の城を賜はりたりしが、慶長十八年切支丹を改むる仰を蒙りて京都に赴きたりしに、謀反の志あるよし訴へし者あり。本多正信忠隣が惡逆の志あるよし申しけると世に申ししが、忠隣をば井伊直孝の領國佐和山にとぢこめ置かれけり。板倉勝重仰を承りて忠隣が旅宿

に行く。折節忠隣碁を圍み居たるに、かたへの人殿を流罪の爲に板倉來れるよし云ひけれども、驚く體もなく勝重に逢ひ、仰を承り更に恨の色もなし。從者大に怒り、讒言により流罪にせられ候ふ事口惜しき事なり。切死せんといひしかば、京都のさわぎ大かたならず。二條の城にて門々を守りけり。忠隣武具を繩にてからげ勝重にさづけしかば、京都のさわぎしづまりぬ。夫れより佐和山に行かれしかば、直孝よくいたはり申されしが、ある時申し開くべき旨候ふべし。直孝承りて達し申さばやと語られしに、忠隣理を正して申さんには、聞し召し明らめられん事必定なり。さらば讒言を聞し召し無罪の者を流されし過を人しらば、君の非をあぐるなり。此れ忠隣が志にあらず。われかく朽ち果つるともつゆちりばかりも惜しからずといはれしかば、直孝感服せられけり。忠隣つれづれのあまりに忠臣記二卷を作られけりとぞ。

三六五　天野康景廉潔高國寺の城を去られし事

天野三郎兵衞康景は、天野遠景が苗裔にて、百貫の地を領し來りしを、東照宮瀧坂におかせ給ひ、遠江榛原郡を切取に仰せ出だされし大剛の人なり。後駿河の高國寺三萬石の地を賜はる。駿府の城經

譽の時竹をからせ積み置き、足輕に守らししに、御領地の百姓竹を盜みしを見咎めて斬り殺す。逃る者ども逃げちりて代宮井戸某に訴へしかば、井戸百姓を殺したる解死人を出だせと天野にいふ。天野盜を殺す事罪にあらず。守る者罪あらば先づ天野罪に行はるべしと云ひければ、井ノ訴へけり。東照宮足輕を誅せよと仰せ出だされしに、天野始の如く申ししを聞し召し、天野は不道のしわざする者にあらず、仔細あらんと仰せられけるに、本多上野介正純天野に逢ひて仰をいなむは臣たる者の道にあらず。臣として君命を承らざる事やあると云ひけるに、天野さては臣たらずは苦しうも候はじといふまゝに、三萬石の祿を辭して、慶長十二年三月廿九日高國寺を去つて行方しらず成りにけり。程經て大久保忠隣尋ね出だし、年ごろ親しかりしかば、小田原の入かといふ所に隱し置かれけり。罪なき人を殺すに忍びず、三萬石の祿をすてて隱れし志を人々稱しあへり。

三六六 井上正就駿府へ御使の事

台徳院殿太田某に五百石の祿を賜はりし時、太田折紙を擲げかへし[illegible]を死罪と思し召しけるに、井上主計頭正就駿府に申して後ち罪を定められ候べしと申す。[illegible]とて井上駿府に參りて、東照宮にかくと申すを聞し召し、泰平久しかるべき基なり。太田は誠に無禮なり。凡そ賞罰中らざれば下の恨むる」常の事にて、太田も無禮とは知りたらん。己が身をすてて諫むる心なるべし。臣下の直言して諫むる者は怒に逢ひて刑罰せられ家を亡ぼし、大軍の中にかけ入る者は多くは身を全うして功名を立つる故に、昔より諫臣を忠の第一とす。然るに今太田にあたふる祿賞に中らざるやと汝を以て問はるる事、政務に心を盡くさるるなれば、泰平の基と謂ふにてこそあれ。汝にものがたりせん事あり。われ三河にて池の鯉を鈴木久三郎が取りて煮て喰ひ、信長より賜ひし酒をも、われにあたへたりとておもふさまに飲みたりき。吾怒つて眉尖刀を提げ鈴木を呼びしに、鈴木肌をぬぎ大音をあげて、魚に人を替ふる不道にて、天下に旗掛げんとは思ひもよらずと罵りし時、予鈴木が言に屈伏して内に入り、つくづく思ふに、走りの者池にて鳥を取りし罪にてとぢめ置きしを諫めんためならんと心付きて、走りの者を赦し鈴木を近付け、汝が志返す返す悅ばしきといひしかば、鈴木涙を流し、密に申すべき事を、今戰國の時なれば手あらなるがよきかと存じ候うて、無禮の事を申ししに、かゝる仰を承りて辱さの身にあまりて候ふといひしなり。今太田にも三千石の祿をあたへられよとて井上をとゞめ給ひ、御刀を賜はりしかば、江戸に歸りてかくと申す。太田にも祿を增し賜はりしかば、涙を流し

て喜びけり。台徳院殿井上には汝が詞によりて孝行を知り、賞罰の道をわきまへたりと仰ありて、左文字の刀を賜はりけり。

三六七　東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松におはしませし比、ある夜本多正信御前にありしに、誰人にてかありけん、姓名を知らず懐より書を取り出だし諫め奉るべしと、かねてより存ずる事の候うて書き候ふものなりと申せば、大によろこばせ給ひ、夫れよめと仰せ有りければ披きてよみけるに、一條よみ終はる度毎にうなづかせ給ひ、尤もなりと仰せられ、よみ終りければ、汝が志感ずるに詞なし、これより後も心置きなく告げよ、返す返すも神妙なりとくり返し仰せければ、忝き由申して退出す。正信居殘りて只今諫め申しし事用ふべき事に候はずと申す。東照宮大いにけしきかはらせ給ひ、いやとよ己が過はしらずして過ぐるものなり。國を領し人を治むる身には、過をつげ知らせ諫むる者は鮮くて、唯諂ひて主君のいふ事道にたがひても、さは候はじと詞を返す人はなきぞかし。諫をふせぎし人の國をうしなひ身を亡ぼし、後世の笑ひ草となりしためし多し。只今われを諫めし者日比心を盡くし、見及ぶ様に付き諫めんと思ひて

書きしるし、時もあらば見せんと思ひ居たりし志、何にたとへんやうなし、其の用ゐるべきと用ゐるべからぬとにはよらざるなり。唯彼れが忠心を愛するなりとぞ仰せける。又或夜の御物語に凡そ主君を諫むる者の志、軍に先がけするよりも大に踰えまされり。其の故は戰に臨みて一番に進み出づるは素より身をすてての事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりとても後の世に名を殘し、死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとぐれば恩賞にて家富み子孫榮ゆるなり。されば得有りて失なき忠なり。諫は然らず、主君不道にて善をにくむにすゝみ出でて直言する者十に九つは刑戮にあひ、妻子をほろぼし果つる様に成り行くぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言は聊も身の爲をおもふ心あらば、いかで主君の前にて直言すべき、唯人に君たるものの賞すべきは諫臣なりとぞ仰せありける。

三六八　三河國箭矧の橋を修造せられし事

箭矧の橋水に壞たれしを造れと仰せられしに、兼ねてより船渡にすべしといふ人の有りけるが、幸にて候ふ。船渡よかりなんと申すを、東照宮汝等末を知りて本にくらし、費をいとふは民の爲なり。

往來の旅人を苦しめんは吾が志にあらず。又要害も其の本を論ずれば、唯國民の和と不和とにあり、險をたのみて敵をふせぐは道を知らざるなりとて、橋をまたかけさせ給ひけり。

三六九　山名禪高敝衣を著せられし事

いづれの時の事にや、山名豐國入道禪高古き羽織の所々敝れたるを著て、東照宮の御前に登られしに、それはいかにと仰せ有りければ、萬松院殿より賜はりたる物にて候ふと申すを聞し召し、舊を忘れず本に背かぬ者かなと御感有りけり。

三七〇　東照宮禮を正し給ひし事

東照宮大度勇畧におはしませし事は誠に申すも愚なり。中にも禮儀を正させ給ひしかば、今川義元討死の桶狹間を、御鷹狩にて過ぎさせ給ふ時、必ず御馬より下りさせ給ふ。これは御幼時義元のよしみを思し召されての事なりけり。上杉景勝に途中にて行き逢はせ給ふ時、輿より下りさせ給ふ。是れも父謙信のよしみを思し召しての御事なり。

三七一　駿府城中へ水引かんとせられし時の事

駿府の城中の池に阿部川の水を引き入れよと仰せ有りしに、水筋に小き寺有りければ、外の處に引き移さんと申しけるを、東照宮寺を移す事をとゞめ、水を入るゝにも及ばずと仰せられけり。此れほどの寺移し候はんにいか計の費の候ふべきといへば、それは大いなる僻事なり。田の爲に水を引かんには、さあるべし。吾が庭の水はなぐさみなり。夫れに人を勞する事やある。無益の事に地を捨つるは敵に取られたるに同じ、百姓の苦しみなりと仰せられぬ。

三七二　東照宮御中指の事

東照宮御指の中節たことなり、年老いさせ給ひては屈伸しがたくおはす。是れはわかき御時より數度の戰に、初の程は麾にて下知させ給へども、事急なるに及びては、かゝれかゝれとて、御拳にて鞍の前輪をたゝかせ給ふに、血流れて出づる。かくのごとき事幾度ともなき故なり。

三七三　金の七本骨の扇の御馬印の事

東照宮金の七本骨の扇に日丸付けたる馬印は、參河の設樂郡牛窪の牧野半右衞門が印なりしを、永祿六年に乞ひ得させられて馬驗となし給ふ。夫れより前の御しるしは厭離穢土欣求淨土の八字を書きたるにて、大樹寺の登譽が筆なり。そのしるし明曆丁酉の火災にかゝれりといへり。然れども扇の御印は其の前よりの事にや、天文十四年、公矢矧川にて織田家と軍有りし時、利なくて危かりしに、本多吉右衞門忠豐とく岡崎に入らせ給へ。御馬驗を賜はり討死すべしと申せども許されず。扇の御馬印を取つて、淸田畷にて討死しける其の間に危きを遁れ給へり。御印は忠豐が嫡子平八郎忠高が家に相傳へ、忠高もまた戰死しける。其の子忠勝が時に至りて、永祿二年東照宮乞ひ返させ給ひたりと云へり。

三七四　加藤忠廣物語 竝飯田覺兵衞が事

加藤肥後守忠廣或夜物語に、吾れは大力あれがしと思ふなり。重き鎧二領重ねて軍に出づれば、[illegible]

ることあらじと云はれしを、飯田覺兵衞つくづくと聞き、先殿物具一領にて數十度の戰に終に手負はせ候はず、朝鮮に攻め入りて鬼將軍と異國の人も惶れ候ふ。死生存亡は天命にて人力の及ぶべきにあらずといへども、能く戰へば生き悪しく戰へば死ぬると申す事も候ふ。國中の民を撫育し、諸士よくなつき從ふ時は、席上にて勝敗の理を論じ、軍兵を下知して進退自然に整ひ候へば、三軍の着たる物具は皆大將の一身に重ね着たると同じ事に候ふ。たれか鋒を爭はん。臣は力を好ませ給ふ事然るべしとも存じ候はずと申して退出しける時、先殿にはいかでかくまでおとり給へるとて、聲をあげて泣きけりとぞ。此の覺兵衞は淸正の臣武功の大將なり。初は角といふ字なりしに、太閤覺の字に書き替へさせられきとぞ。覺兵衞云ひけるは我れ一生主計頭にだまされたり。初めて軍に出で功名しける時、朋輩多く鐵砲に中りて死しけり。危き事よ、はや是れまでにて武士の仕へはすまじきとおもひたるに、歸るやいなや淸正時をすかさず、今日の働神妙いはんかたなしとて刀を賜はりき。斯くの如く毎度其の場を去りては後悔すれども、主計頭其の時をうつさず陣羽織或は感狀をあたへ、人々もみな羨みてほめたてたりしゆゑ、其れにひかれてやむ事を得ず麾を取り、士大將といはれしは、主計頭にだまされて本意を失ひたるなりと、忠廣沒落の後ち京に引き籠り、再仕を求めずしてありける時語り

けりとかや。

三七五　前田利常戰死の士を弔はれし事

前田利常大阪の軍に功有りて加賀に歸り、討死したる士の爲にとて、報恩寺といふ一宇を建立し、戰死の人の追福にせられ、自ら彼の寺に詣でし時、討死の士の親族を供に連れられける。自ら香を燒き涙に沈みて、深く悲しまれしを見る人聞く人、此の殿の爲に死なん事露塵ばかりも惜しからじとて一同に哭し泣きけりとぞ。

三七六　黑田如水遺言の事

慶長十九年黑田孝隆入道如水病重く成りて子の甲斐守をよび、汝は親にまされる事有り。我れもまた汝にまされる事二つあり。語つて聞かせん。今我れ死なば我が士はいふにや及ぶ。汝が士大將より士に至るまで悲しみなげくべし。汝死して我れながらへたらば、誠に大なるさかしまごとなれども、如水おはしますとて力をおとす士有るべからず。是れ人のなづき從ひて、吾れに服する事汝に勝る其

の一つなり。次に我れは無雙の博奕の上手なり。關ヶ原にて石田今しばらく支へたらば、筑紫より攻め登り、下部のいふ勝相撲に入りて日本を掌の中に握らんと思ひたりき。其の時は子なる汝をもすてて一ばくちうたんとおもひしぞかし。又紫の袱に包みたる草履片足に木履片足取り出だし、軍は萬死に入つて一生にあふ習なり。十全を思慮しては叶ふまじ。たとへば草履木履をはきたるごとく、二ツものかけの軍をする心得せられよ。汝は才智有りて先の事を豫め料る故に大功はゆめゆめ叶ふまじ。偖てめんづと云ふ物は飯を盛るものよ。上天子より下百姓に至るまで、一日として食物なくては世にながらふる者はなき事なり。國を富まし士卒を强うするの根本一大事、此の飯入にあり。必ずわするべからず。かゝる故に此のめんづをかたみに參らすといはれけり。

三七七　本田正信加藤嘉明を諭されし事

加藤嘉明關ヶ原の戰ひに大功有りしかば、五十萬石を賜はるべき處に、本多正信其の事をおしとゞめたりと、嘉明傳へききて本多を恨みられけるに、正信行かれしかば願ふ處とて對面せらる。正信の曰はく、大國を賜ふべきとなりしを。我れ然るべからざる由を申し止めて候ひき。是れ忠ある仔細の

候ふ。其の仔細は御身は武勇智謀たぐひ稀なる人にて、又豊臣家の恩深し、人の疑有るべし。功成り名遂げて身退くと申す事の候ふ。今領國の少きに聊の恨なくおはさんに、恩遇子孫に到らん。若し大國を領し給はゞ、必ず人の後にかゞむ人にあらずと世疑ひおそれて、禍あるべしと存ずる所なり。去れども恨みられんには力なしと云ひたりしかば、嘉明嗣なくて止みけり。

三七八　安藤直次先見竝本多正信遺言の事

安藤帶刀直次物がたりの時、本多上野介正純は家亡ぶべきなりと云ひしに、程なく本多に祿を賜はりけり。人々直次にしかじかいはれしにいかにと問ふ。直次聞きて後を見られよと云ふ。又下野の宇都宮二十萬石を賜はる。人々直次に我等承り候ふ所へ、くるしうも候はず、再三かゝる事ないはれそといふ。直次打ち笑ひ正純家亡びん事近きにありといふ。やがて正純國を召し放たれしかば、人々又直次に神智有るが如くに候ふ、いかなる故にやと問ふ。直次さればとよ、台徳院殿關ヶ原の軍の時木曾路にて遲留の有りしを、正純是れみな父正信が仕わざに候ふ。死罪に行はれなば嗣君の過なき事を人存すべきよし申ししを、台徳院殿我が爲にかくまで云ひつると仰せられし由、正純聞きて己が功と

思へり。父を死罪にといへる三千の刑不孝にまさる事や候ふ。此れ家の亡ぶべき理なり。まして忠を君にいたすは誇るべき事にあらず。正純の亡ぶるいと遲かりきとぞいはれける。

〔正信に三萬石の祿地まし賜はりし時、臣はもと鷹師にて候ふを、かやうに取り立てられ候へば、只今の祿分に過ぎたり。必ず天の冥助に盡き申すべしと固辭せしが、其の後子の上野介に、我れなからん後汝に祿をまし給はりなば、三萬石は我れに賜はりたれば辭すべからず。それより增し賜はりなば、必ず固辭すべし。祿の身に過ぐるは禍なりと遺言せられしが、正純父のをしへに背き、終に國亡びたりといへり。〕

三七九　台徳院殿御行狀の事

台徳院殿は殊に禮義正しくおはしまし、苟にも疾言おはしまさず。事なき時は泥塑人のごとくになんと人申ししが、極めて下民に御心を盡くさせ給ひ、孝道深くおはしましけり。又信を失ひては天下は保ちがたしと常に仰せられ、御鷹狩に出て給ふ時も時を定められ、御膳の半にも辰の鼓をうてば箸を捨てて出で給ふ。近習の人奉膳終はらざれば辰の大鼓をうたず。井伊直孝是れを聞き、近習の人々

に向ひ、是れ君を愛すると思へるは、大なるひが事にてこそあれ。君正しき道を好みたまはば、汝たちも正しき道にて仕へられよ、かやうに事を料られなば、必ず阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべし、とく膳を奉りて鼓の前に終りなんに何の苦しき事やある。是等は誠に小事なれども君を欺くともいふべし。君子は禍を未然に防ぐものなりと戒められけり。

三八〇　林道春格言の事

直孝ある時林道春に物語して樊噲が勇氣たくましきと聞く。されども弓箭取の珍しき事にもあらず。我れとても噲が下に立つべからずといはれしに、道春噲は誠に穢多の子にて筋目もまさり給へり。されども爰に一つの故の候ふ。戰ひに臨みて矢石の中に先掛するのみを勇氣とはいふべからず。是れは匹夫の事なり。噲が顏を犯して高祖を諫め申しし事有り。足下にはいかゞ候ふべき。廣言をはき給ふともよくよく自ら省みられよ。噲に及ばぬ事の有るべきといへば、直孝恥づる色あり。是れは其の比大猷院殿御病氣とて、大名に相見なかりし故に斯いはれきとかや。世に道春一生の格言とせり。

三八一　藤惺窩秀吉公を論ぜられし事

惺窩藤斂夫東照宮の御前にて、秀吉は大膽なる人なれども大心なりとは申すべからず。朝鮮より明に攻め入らんとは大膽なれども、秀信を信長のあととは仰がれず。自立して日本を掌握せられしは大心にあらずと申されけるが、後に此の事を四辻亞相公理卿にかたる人あり。亞相の曰はく、われも其の論尤もなりと思ふなり。大佛建立はかの猿ごころがはなれぬなりといはれき。

三八二　紀伊大納言頼宣卿諫言を歡び給ふ事

紀伊大納言頼宣卿は東照宮の十一男にておはしませしが、幼き時より東照宮の膝下におはして文武の御物語を聞し召し、尋常の質におはしまさず。諫を納れ給ふ事もなみなみならず。或時腰帶といふ備前長光の刀にて、立ちげさを試み給ひしに、快くよく切れて其の儘立ちたるをつき給ひければ、二つに成りて倒れけり。左右一同に驚き入るばかりなり。大に悦びて那波道圓に異國にもかゝる利劍もありや、又かく手のきゝたる人やあると仰せありしに、道圓承り異國には龍泉・太阿など申す利劍

も有之候。人を殺して樂しむ人は夏の桀王・殷の紂王と申す悪王おはしまし候ふ。凡そ人を害して面白しとおもふは、禽獸のしわざにて人間にてはなく、日本にて罪人を切り候ふは穢多こそいたし候へと、憚る色なくいひしにつと入り給ひぬ。やがて道圓を呼びて先に申しつる所こそ至極の道理なれ。これより再び自ら試みる事有るまいぞ。諫言こそ返す返すも淺からぬと賞美ありけり。又ある時大高源左衛門といふ士に司る事に付きて、われ不幸にして良き士持たざるゆゑ、何事もおこたりに成りぬとしかりて、人のなきなりと有りしを道圓聞きて、己が目の昏くて人のよしあしを見明らめざるを咎めずして人のなきとは何事ぞや。外様古參にも新參にもよき人を選み出ださんには、智者も勇者もいか程も有るべきに、人のなきとは目の明かぬ故なりと直言しけるをつくづくと聞き給ひ、道理至極せりとて再三感ぜられ、深く先の詞を悔み給ひけるとぞ。道圓常に其の子にかたりて亂世には臣士君の爲に死する事有り。太平の世諫めて死する事を忘るべからずと戒めけり。

三八三　由井正雪反逆の時賴宣卿出仕の事

慶安四年辛卯四月二十九日大猷院殿過ぎさせ給ひて、其の七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ、紀伊大納言殿の仰と稱し、判形を似せ謀書を所々に遣はし、丸橋忠彌・芝原又左衛門以下數百人徒黨し、御鐵砲の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是れに與し、埋火にて遠くより火をさし、徒黨の者ども船にて海上に出づる時、藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替はりしたる者三人有りて訴へ出であらはれしかば、丸橋をはじめ生け捕られ、正雪は駿河宮の町にて自害しけり。右の謀書を數通浪人どもの許に有りける故、大臣集まりて一大事と案じ煩ひ、とかく賴宣卿を殿中へ召して、此の書を出だす外有るべからず。其の時様子あしかりなんには直に捕へ申せとて、くつきやうの兵をかくし置きて出仕を待ち居たりしに、尾張中納言光友卿・水戸中納言賴房卿も出仕あり。此の事を告げ申しけるに、尾張中納言何條かゝる企有るべきや。是れ謀書にてあらんとなりしに、水戸中納言もいかにも左候ひなんとぞ宣ひける。されども各〻手に汗を握る處に、賴宣卿出仕有りて座につき給ひしかば、井伊直孝・酒井忠勝・松平信綱此の度浪人どものたくみの次第を申し述べたる處に、阿部忠秋かの狀を披露しけり。賴宣卿殘らず見給ひて、氣色うちとけて返す返すもめでたくこそ候へ。もはや何のおそるゝ事も候はず。其の仔細は彼の徒黨の面々外様大名の判を似せ、謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れもしや氣ちがひて、謀反を企つるとの疑も有るべきに、我等が判を似せたる故事故な

く治まりたるなり。幼き公方の御身にてもし御疑ひもあらんには、我等只今國さし上げいかにも仰せに從ひ奉るべし。天下安全にてこそあれと悦面にあらはれて見えしかば、兩公をはじめ一同に感じ譽めぬ人もなかりければ、賴宣卿其の浪人どもの中壯年の者四五人助け置かれよ、重ねて詮議あるべき爲なりとの給ひけりとぞ。

三八四　水野重長諫言の事

賴宣卿紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩ありて、港に船を付け陸路を經給ひしに、折節舂きたる麥を莚にならべ、僅かに路明きたりしかば、皆農民の年中の粮なるぞ、供の者ふむべからずと再三制して歸り給ひければ、百姓ども悦びあへりしを、供なりし横目の長臣の前に參りてかゝる次第に候ふと申す。何れも感じあへけるに、水野淡路守重長一人今日殿の御ふるまひこそ心得ね。かゝる事故下々の奴原殿の內兜を見て馬鹿にするぞとよ。殿の通らせ給はんには麥を脇へ引きのけ、水を打つてこそ有るべきに、何ぞや麥をほして通路をさゝはる事奇怪なり。一國の主の仁はさは無きものなりといひしを、賴宣卿聞き給ひければ君も、君たり臣も臣たりと人々申しけり。

三八五　松野惣太郎前田權之助賞せらるゝ事

賴宣卿馬を乘り給ひ、阬の中にて頭巾の風に落ちけるを、中に取つて又鞍に乘り直り給ひしを、吉見喜右衞門といふ者松野惣太郎といふ者に語りけり。折節賴宣卿馬場におはしける時なるに、惣太郎聞きて殿には未だ馬上は練れ給はぬなりといひければ、賴宣卿仔細いかにと尋ね給ふ。惣太郎さん候ふ。東照宮は海道一番の馬上の御名人と申し奉りたると承り候ふ。小田原陣の時山道を武者押して過ぎさせ給ふ。丹羽長重・長谷川秀一・堀秀政峰筋をおしけるが、東照宮の御旗をみて皆々おし前を覲る。玆に一ツの谷川の細橋有り。此の橋へ行きかゝる人々橋の下を皆歩み渡りにす。東照宮馬上にて橋際へ著かせ給ひしかば、三人の大將聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さるゝみよと云ひあへりけるに、馬より下り給ひ、御馬は遙の下を口つき四五人にて牽き渡しけり。人々是れはいかにと云ひけるを、かの三人の大將大に感じ、馬上の達人とは是れをこそいふべけれ。馬上の達者は危き事はせぬものなり。殊に大事の軍を前に置きての事なれば、かく有るべき事よと感じたりと承り傳へ候ふと申しければ、賴宣卿つくづくと聞きて大によろこび、其の詞を書きて硯箱に入れられけり。又前田權之介といふ士

ある時頼宣卿へいひけるは、今朝ひとり思慮せる事の候ひしに、大將の一言ほど重き事は候ふまじ。千金にも人の命を替ふるものは有るまじきに、大將の一言により、忽ち命を露ちりばかりもをしきとは存ずる事なきは、昔よりの事に候ふと申しければ、とかくの詞なくて時服をあたへ給ひぬ。

三八六 佐々九郎兵衞經濟格論の事

京極刑部少輔高知、播州龍野を領せり。國用甚だ乏しかりければ、公儀の事は堀田若狹守に計り、藤堂大學頭高次・高知の長臣岡七郎兵衞定次相加はりて評議し、新參の士に年を限りて、永く暇を出だすべしとの事なり。佐々九郎兵衞長光年老いぬれども、思慮ある者とて呼ばれければ、江戸へ行き藤堂・堀田に相會す。評議の始終書き記して佐々に見するに、是れは存じ寄らざる事なり。是非新參の面々に暇を出だして、足らざるを足さんとならば祿多き者然るべし。かく申す佐々一人が祿數十人より多し。流浪すともさのみ艱難にも及ばじ。小祿の人々は道路に乞食せん。是れ不仁の至りにて行ふべき事にあらず、つくづく論ぜられよと諫む。佐々が思慮を問はるゝに、高次五百貫目を取り次ぎて貸さんには、五百貫目は臣歸路に京にて借り求めん。されども爰に一つの大切の事あり。幾度かくすとも、殿の能・歌舞伎・鷹狩・屋敷の設・衣服・器物萬事に費をなし、國の長臣其の職に有るもの身がまへしてあらば何の益かあらん。此の諫言は外戚といひ大祿なれば、高次の任なるべしといふにより、一座感じて佐々が言を用ゐ、暇を出ださるゝ者一人もなし。さて長光定次に向ひて此の事を一旦評議に及ぶとも、國の長臣として猥りに順從して一言も爭はず、不忠なり。世の國の長臣となる者其の身の饒なるを省みず、倘貪る心より其の主君に諛ふ。古より軍に臨みて死するは多く、諫めて席上に死する者は尠し。成り難きをなすをすぐれたりとす。何ぞ諫めて死せざるべき。大かた財用の乏しきに及びて、よその金銀を借り求めて、忽ち困窮に至りては士の祿をはぎとり、約束の詞を違へ非義不道の事を申し行ふにも成りぬるぞかし。常に儉ならで足らざるに及んで儉に患ふる共、其の本正しからずば武備を全うせんとおもへども、いかで事よく成るべき。君臣とも國郡を盗み祿を竊むの凶賊なるに、其の恥づべきを恥とせず是非なき事ならずや。汝其の職に居てかゝる心なきはいかにといへば、定次一言の答もなかりけり。

三八七 不破彥三武備の事

加賀中納言利常の士不破彦三、四千石の祿を受けて武名を知られたり。其の子も同じく彦三といふ。性質愚鈍に見えて常に怠りがちなる事多し。是れを諫むる人有りて時節といふ事有りといふ。悦び入り候ふといひながら聽き用ゐるしるしも見えざれば、又いさめたり。其の時不破あざ笑ひ、才覺ある御身五百石、我れ愚なれども四千石さのみな誹られ候ひそといへば、色を變じて人の勝る劣る祿の多少によるべきや。何とてさ程理の不通なるぞといふ。不破それは我れも知りぬ。今の詞は戲なり。亡父常に我れを誡めて、小ざかしき利根だてなる事ゆめゆめすべからず。人の心に入らんとてかりそめにも諛ふ事有るべからず。唯守るべきは義の一筋なり。汝武勇の身なり。士の義を忘れざれと申しおきたりしに違はんかと、日夜是れを勤むるの外他事なし。衣食の美を好まず、從者と艱難を同じくせり。日本第一の大家なる加州の士中、我れと祿同じき者多し。くらべ見られよ、人馬のすくやかなる武具の揃ひ整へたる、我れに勝る者有りとも覺えず。又利にたよりたる事やなしたる、諂ひたる事や候ふ、僞を申したる事や候ふ、平生日々身に省みて弓箭の家に生れし職をゆるがせにせず。亡父と親しき人なりし故、かく諫めたまはる事も、忝くよろこび存ずるなり。されども正しき道に教へ給はるべきに、只時を見て世に從へとや、實の本意には非るべし。さらば昔に從はずして本意に

從はんは如何候ふらんと答ふれば、諫めし人大に心服したりけり。

三八八 井伊直孝衣服儉約の事 附戰國の時質素なりし事

井伊直孝大坂冬の軍に物見二騎をやるに、雨に濡れて歸りければ、則ち著られし小袖二つを脫ぎてあたへられけり。扨て安藤帶刀の許より小袖をもらひて、島の小袖革袴にて兩御所の御前に出てられけるとぞ。直孝の領地近江の彥根は、湖上より船を浮べて都に行くに甚だ近し。太平に及んでやゝ奢靡の風俗になりて、彥根の士も都近ければ衣服美麗になりけるを、直孝戒めずして儉約にすべき道をはかり、江戶より歸る時、木綿の衣服を供する士の數密に用意して、彥根に著く時、俄にくばりて著せられたり。彥根の侍衣服をかざりて迎へけるに、供の士皆木綿の衣服なり。彥根の人々身を省みて美服を裂きたくありきとぞ。一事の法令をも出ださず彥根のおごりやみてけり。

〔戰國の時衣服質素なる事論ずるを待たず。瀧川左近將監一益關東の管領として厩橋に至る時、諸將對面の爲來りしに、只今一つ有る衣服の垢つきたるを濯ぎて赤裸にて候ふ程に、暫く待つて給はれといひし事語り傳へて、直孝の衣二つ物見の士に與へて、著替のなかりしも皆符合したり。

泰平に及んでやゝ衣服の美に成れりしかども。寛文の頃まで尙其の遺風あり。然れども金銀利倍の物語する事は、士の恥と心得居たりけり。酒井雅樂頭忠淸大老たりし時、江戸の殿中にて、春の末にや休所にて下に著たる服の汗づきたるを欄干にかけたるが、所々つぎたてたるが見ぐるしきと歸りて語られしに、其の事を司りし老女の時移りて君の奢り給ふにこそ、わが一生は今の如くならんといひし事あり。此の事は嚴有院殿の御時なり。古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて用ふべき事には吝ならざりしなり。關ヶ原一戰の後成瀨吉右衛門は伏見に在り。其の子隼人正駿府に在りけるが、折節父の許に金を贈りけり。居間の天井に釣り置きて、客來れば、あれ見給へ肴を調味せよとて隼人が贈りたる金なり。是れを見れば美味に勝れりとぞかたりける。大阪冬陣和平の後、隼人が子何某祖父の所に來りければ、此の度は事故なけれどもやがて事あるべし。其の時よき馬をもとめよ。江戸廣しといへども金二拾枚の馬はさのみ多からじ。これをとて二人の孫に各〻金二拾枚をあたへしとなり。昔の士風想ひ見るべきにや。」

三八九　永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事

永井信濃守尙政に執政の職を仰せ出だされし時、伊井直孝に對面し、不肖の身かゝる任を受け甚だ恐懼に及び候ふ。敎訓を得て其の職に居候はばやと申されければ、直孝尤もの事に候ふ。我れをしへ申すべし。身を潔くし明朝來られ候へと有りければ、辱きよしいひて沐浴し、禮服して其の明の朝行かれしかば、直孝出であひて、世の諺に油斷大敵と申し候ふを定めて知られたるべし。萬事の危きに及ぶ事、皆是れゆだんより破るゝ事の候ふ。此の事かたく忘られなといはれけり。

三九〇　中院通茂公幼宮を敎訓の事

靑蓮院の宮にや、幼き宮に中院內府通茂公後見たりしに、常に碁双六を制せられけり。ある時公參られしに、將棊の盤の在りしを見て、家司坊官を招き、兼て申ししにかゝる物を何とて置きたるぞ、はしたなき業は素よりあしけれども、たとひ有りても年の長じて心づきの有りてやむ事もあるなり。是等の類はさしも惡事にあらざる故、其の事に慣れ空しく月日を過し、學問の志怠るものなれば第一のあしき物にこそあれとて退出せられけり。又ある時其の宮に參る人尺八の名管を持ち來れり。重器なりとて人々玩びける時公參りて、是れは、誰れが業ぞ、かやうの物をとて柱に打ちあてて碎きけり。

かの主の甚だ重器と思へるに、かく計になしていかにせんといひけるに、其の主來り事のよしを聞きて、誰某が持ちたると内府の聞し召されん事恐しく候ふに、それとしられ申さぬは大なる幸に候ふといひけりとぞ。

三九一 松平信綱恭敬の事 附信綱幼年奉公の事

松平伊豆守信綱出仕の時、裏付の上下著る事なし。屋敷に在りても是れを著られず。常にいはれしは人の心衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存ぜずしては忠を盡くす事を得難し。先づ衣服より心を付けて恭敬をわするべからず。我れにおいてはかくの如くつとめざれば、忠勤を成しがたしと云はれけり。

〔信綱實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。嚴有院殿御誕生有りし時より御家人になされ、御あそび相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に雀の巣をくひ子を産みたるを、若君こなたより御覧じて、長四郎よ取つてまゐらせよと仰せけるに、年十一歳なれば、いかにもかなふまじきよしを申す。晝は驚きて飛び去りもやせん。よく見置きて日暮れ

てこなたの軒に梯さして登り、忍び行きて取るべしと有りあふ人々進めければ力なく、日暮に忍びのぼりやうやうつたひ行きけるが、ふみ損じて御壺の内にどうとおつ。大猷院殿御刀とらせ給ひ障子開かせ給へば、御臺所ともし火とつて出でさせ給ひ、御覧ずるに長四郎にて有りけり。大猷院殿汝は何ゆゑ爰には來れるぞと御尋ね有りしに、けふの晝御殿の軒にすゞめの子産みたるを見て餘りのほしさにとりに參りて候ふと申す。いやいや己れが心にはあらじ誰れがをしへけるぞとさまざまに御推問あれども幾度もあらそひぬ。年比にも似ぬ不敵なれば、とく大なる袋の中へおし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ事のよしを有りのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へと仰せけれども猶詞をかへず。夜既にあけて常の御座を出でさせ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、彼が幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰せなりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房たちに仰せありて朝飯をめしてたべ候へとて湯はりて、又口を封じ給ひてけり。晝ほど入らせ給ひて、又御推問あれどもつひに其の詞屈せず。御臺所御わび言ありしかば、さらば重ねて愼めよと仰せ有りて御赦しあり。御臺所に向はせ給ひ、かれが今の心にて生ひ立ちたらんには、竹千代殿の爲には雙なき忠臣にてこそ候はめと、殊の外よろこばせ

給ひけるとかや。されば諸國の大名の代々奉りし人質をかへし、殉死を禁じ大佛を鋳て錢とし、明暦の火災東都の城郭を始めことごとく灰燼となり、諸人焦爛にくるしむ。殊に去年由井正雪の逆徒のさわぎありし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みてたち所にとり行ひし事皆其の所を得て、程なく世の人心も靜まり、昔に替はらぬ時となりぬる事、いにしへの賢輔にも恥づべからずと申し傳ふる所なり。」

巻の十九

三九二 細川忠興兜の立物の説

細川忠興に兜の物ずきをいかにせばやといふ方のありしに、詳に書きしるして使にあたへられけり。使立物の下地桐の木とかき給へるは、折れやすき物にていかゞ候はんといへば、忠興色を變じ、汝は弓箭取の使とも覺えぬなり。軍に臨む者誰れか生きて歸らんと思ふべき。二つなき命だに然り、何條立物の折るゝを厭ふべき。輕きこそよけれ。立物の折るゝばかりは働きたらば、何の見ぐるしき事あらん。ひと面目にてこそあれといはれけり。

「天正元癸酉年七月信長淀の城を攻め落されしに、岩成主税助を細川藤孝の士下津權内打ち取りし時、忠興八つの年なりけるが、長岡監物が肩にのりて、監物が立物鹿の角に取りつき見物して興に入りたりしを人見て、後年の生ひさきをおしはかりけりと也。」

三九三 忠興飯河豐前同肥後父子を誅せられし事
并 肥後が妻節義に死する事

細川忠興豊前にありし時、同州龍王の城は飯河豊前宗祐祿三千石、岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石、宗祐の子寵せられて長岡の姓を與へられしに、父子とも罪有りて、慶長十一年七月廿一日二人とも誅せらる。宗祐は河北石見・邊見治左衛門を討手とし、宗信は增田藏人を討手とせらる。宗祐散々に戰ひて死傷多し。宗信が妻は米田助右衛門是政が女なり。宗信と睦しからず。對面せざる事三年に及べり。忠興是政は後室の尼雲仙院といへるをよびて、豊前肥後罪有りて誅すといへども、汝が女と孫の女に罪なし、密に告げ知らせて命を助けよとなり。後室の尼聞きて肥後が妻常に中よからず、然れども夫をすててかゝる時にのがれんとは得こそ存ずまじけれど、仰せ恭きをば告げ申さんとて文して告げやりければ、誠に仰は恭けれど、今はのきはに夫をすてて遁れん事人道にあらず。女子は東西をわきまへざる者なれば、養育して給はれとて、使をつけて尼のもとへ送りけり。宗信是れを聞きて大に悔み、我が過を謝し、終に共に自害したりけり。

三九四　黒田滿德丸袴著の時母里但馬舞をまひし事

黒田長政の嫡子滿德丸とて、四の歲袴著の祝有り。母里但馬はひき目親にて、常にちいとなつかれしが、其の時但馬滿德丸の髮をかきなでて、とく成長して功名し、父上より克くし給へと申しければ、長政何といふ事ぞや、我が武略をさみするか。若き時は汝又備後(小河)とも相謀りき。朝鮮にわたり、又關ヶ原の合戰も、皆汝等の扶によらず大敵に勝ちたり。其の後世大平なれば立つべき武功もなし。滿德いかにおもふとも、我を越ゆる事存じもよらずとて膝立て直し、但馬をにくまれしかば、人々汗を流すところに、但馬かたへに向ひて、故なき怒かな、人の子に功名し玉へと云ふは僻事かとて、物ともせざる體にて長政の方を見向もせず。長政いや父よりまされとはいかにと怒られしかば、但馬打ちわらひ、心を靜めて聞き玉へ、武功は幾度事にあひても仕すましたりと思ふ事はなく、度ごとに不足なる者に候ふ。他人はたゞひなしと褒めたつれども默して過ぎ候ふよ。よき軍兵を引き具し、地の利よく幸に勝ち玉へるを、自讚は以の外のひが事にてこそ候へ。今まで勝軍になれて、每度斯の如くならんとならば必ず敗北あるべし、味方崩れたる時一足も引かず討死は殿の得物なり。其れは大將の道にあらず候ふ。味方を討たせず軍に勝つを良將と申し候ふ。殿の武略進む一途は得ものにておはせ共、進退圖に中る一途はかけでおはしまし候ふ。此の是非の論は備後老功の者にて候ふ間、時々とはせ給へ。滿德どの只一人かけ出でて討死する事は葉武者の業なり。死なぬ樣に軍に勝つを大將の道

にはする事に候ふ。此の詞よく覺えてとくより能くし給へと髮をなでて、長政の怒を物とも思はぬけしきなり。備後守次の間に酒宴してありしが聞きつけて、銚子かはらけ取り持ちて走り出で、長政の前に跪き、憚も顧みずすゝめ奉り候ふとて盃を差し置き、若き時如水公の小姓たりしかば、御酌はいたしならひし。小笠原の禮義存じ出だし候ふとて、酒をすゝめければ、長政うちとけ盃をかたむけられしかば、それを但馬に賜はり候へとて、氣ちがひよそれへ罷り出でよといひければ、但馬すゝみより、其の盃を戴きて三度引きうけ飲みて後ち、殿はよしなきに怒り給ひ、今日の祝に興さめ候ふ少し醉ひ玉へといひしかば、長政も又盃に十分引き受けられし時、但馬いざ肴よとて田村をうたひ出だし舞ひすましたり。鬼の如くなる男の稽古せしが拍子も耳目を驚かせり。皆一同に兵のまじはりを謡ひて、酒宴盛になりければ、備後守高聲に若き人々能く聞かれよ、心掛の深きも殿又思慮なきも殿なり。大たはけは但馬、又頼もしきは但馬なり。黒田の家の武勇目出度き時ぞよとみなみな酒を酌みかはし、事あらん時鎗を合はせ、なすべき事をなし置く時は何事もゆるし玉ふぞ。人々うたへや舞へやとて酒宴やみてけり。又長政或年の春歳初の祝に、栗山備後守がもとに行かれしに酒宴あり。四ツ比に及んで、長政われ居たらば若き者ども酒おもふほど得飲まじ、あとにてうちとけて酒もりせよとて歸られしに、但馬今少し居て若きもの共に懇に詞をかけ、人に悦ぶやうにこそ有りたけれ。とかく我がまゝの直らぬ殿なり。頂に大いなる灸をしてこそよかりなめと大音にて云ひしを、長政聞かぬ體にて歸られけり。

三九五　龜田大隅江戸の石壁を築きし事

江戸の石壁をきづかるる時、淺野長晟仰せを奉りて龜田大隅高綱を奉行とす。石壁成りて後崩るゝ事三度に及べり。台德院殿打ち廻り御覽じて何とて崩れしやと仰せ有りしに、龜田謹んで其の事に候ふ。大隅軍の時鵄の觜の鎗を提げ先がけ候ふ。陣つひに崩るゝ事はなく候ふ。石は無心物にてせんかたなく候ふと申す。事終はりて鹿毛ぶちの馬を大隅に賜ひけるに、士の二毛の馬に乘ることや候ふ。にげたる事もなく候ふに口惜しく候ふといふを、土井利勝申し上げられしかば、別の馬を換へて與へよと仰せられけり。龜田大剛の者にて、十文字の鎗下阪忠親が造にて、さやは鵄の觜に造り、栗色にぬり總螺鈿の柄なり。

三九六　吉岡建法狼藉太田忠兵衞手柄並太田武技を論ずる事

慶長年中禁裡に散樂の有りし時貴賤群參しけり。吉岡建法といふ染物屋劍術の妙手にて有りしが、無禮の事ありしを雜色咎めければ、建法外に出で羽織の下に脇差をかくしもとの所に入り、先の雜色をたゞ一打に切つて、夫れより縱橫にかけ廻る。もとよりあくまで手ききなり。手負數をしらず。板倉伊賀守勝重日の御門にありしが、眉尖刀の鞘をはづし向はれしを、太田忠兵衞何條手おろさせ給ふ事やあるとてかけ行くを、勝重此の長刀にてとてあたへられしかば、太田吉岡に向ひ、惡逆無禮のをのこ首をのべよと走りかかれば、吉岡は紫宸殿の階に息つぎ居しが、我れに太刀打せん者汝ならではといひて階を下りて立ち向ふ。太田已れに眉尖刀は無役なりといふまゝに刀をぬく。吉岡走りかゝりさまに倒れけり。太田大音あげ倒れたるを切るは士の恥なり、立つて勝負せよといふ。吉岡立ちあがる所を飛びかゝり、一太刀に切り殺しけり。勝重悦びて太田に祿を增し盃をあたへて、後ち吉岡が倒れたるを切らざるは勇餘り有るといへども、氣に驕の失あるに似たり。吉岡商買賤しき身なれども、劍術はいかなる人も及びがたし。倒れしは天の與へなり。然るを切らざるは虛を打つの理にくらきと

もいふべきにやと云にれしに、太田仰せ誠に辱く候ふ。こゝに一つ存ずる故の候ふ。多く敵の倒れ候ふをおこしも立てず打たんとする故に身を忘れ脚を切られて倒れたる者の勝になり候ふ。倒れ候ふに虛實の二つ有り。吉岡が倒れ候ふは虛にて候ふ。吉岡たとひ實に倒れ候ふとも、たやすく斬らるゝ男にあらず。倒れし時は身を防ぐ事虛に似て候へども、近付くならば切らんと存ずるは實にて候ふ。虛にも實にも倒れ候ふものの立ちあがらぬといふ事はなく候ふ。其の立ちあがる時は身を防ぎ敵をきりはらはんと存ずる心虛になり候ふ。そこをたやすく打ちてたやすく切りとめ候ひき。誠にかゝる小さき業匹夫の事にて、殿のしろしめす理にても候ふまじ。されども陣をわかち軍する道にも相かなひ候ふ事もやと憚を省みずして申すにて候ふといへば、勝重大に感ぜらる。

三九七　柳生宗矩劒術御師範の事並宗矩先見の事

柳生但馬守宗矩は大和國にて世々柳生の庄の地頭なり。關ヶ原の戰の後ち德川家に仕へ奉りて、父より劍術を受け傳へ無雙の妙手と聞えてけり。大猷院殿御年わかかりしより此の技を好ませ給ひ、宗矩御師範に參りて御心を盡くさせ給ひ、頗る其の妙を得させ給ひけり。只此の藝によりて其の人を信

じ敬服させ給ふと人々おもひけるに、實に其の技によつて治平の政事を喩し申しけるにや。常に御側の人々に、天下の治めは但馬守に學びてこそ、其の大體を得たりと仰せられきとぞ聞えける。宗矩年老い病重かりし日も、辱くも家に入らせ給ひき。正保三年三月終に空しくなりけるに、其のころためしなき贈位の事を執し仰せられ、從四位下にあげさせ給ふとかや。宗矩死せし後事にふれて生きて世にあらば尋ね問ふべきものをと、深くしたはせ仰せられしは誠に有りがたき事なりし。其の中一事相傳ふるは、島原凶徒の亂、江戸に聞えし頃は十一月十日なり。宗矩有馬玄番頭豐氏の家に散樂有りて行き向ひしに、家隷尋ね來て但馬守を呼び出だし、肥前國島原に土民相集まりて楯籠り候ひぬ。是れ切支丹宗門の者にて、松倉にそむき候ひての事なりと早馬來り、板倉內膳正追討の御使を承り、はや御發向候ふとぞ申しける。宗矩さらぬ體にてもとの所に歸り坐し、用人に向ひ急ぎて宿所に歸るべき事出來ぬ。よき御馬をかし給へといへば、心得たりとて馬に鞍置きて牽きたつ。宗矩打ち乘りて品川にはせ付け、板倉は如何にと問へば、遙に過ぎさせたりと答ふ。川崎に馳せ付けて問へば、今は二三里も隔てたりと申す。日已に暮に及べば引き返して御城に上り、近侍の人々を以て申すべき旨有りて伺候し候ひぬと申せば、軈て御前に召して何事にやと仰せ有り。宗矩畏り只今承り候へば九州に切支丹

宗門の逆徒發起し、內膳正重昌追討の御使を承りはせ向ふよし。仰せと稱しおし止むべきと存じ追つかけ候へども追ひつかず候ふ。此のよし申さん爲なりと申す。何故におし止めんとは思ふぞと御尋ねあり。さん候ふ。君はひたすらの土民ばら立て籠り候ふと思し召して追討の御使かろくこそ候へ。宗門に付きて起る軍は大事のものにて候ふ。重昌一定討死仕り申すべし。いかにもはかつてとゞめばやと存じ候ひしと申す。以ての外御氣色損じ御座を立たせ給ふ。宗矩猶夜ふくるまでも退出せず。此のよし聞し召し又御前に召して重昌討死すべき仔細はいかゞと御尋ねあり。宗矩さればこそ兵の道は勇を先とす。勇士は死を慝しまず。三軍みな恐れざる事は今の名將の專一とする事にて候ふに、凡愚の輩宗門を深く信じ、其の法をかたく守りて死を以て身の悅とす、百千の人死を恐れざるの勇士となり候ふ事は宗門の故にてこそ候へ。織田家の武威を以て一向門徒に勝つ事能はず。三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ。大事の時重昌年わかく候へども、數十萬人に選ばれ唯一人大事の御使承りたる者なれば、是等の土民打ち亡ぼすべきに何事か有るべき、誰れかは其の下知を背くべきと思し召したらんは事の違ひにて候ふべし。重昌位高く踈も有りて、年頃重き職を司つて常に人の敬ひ候ひなんには然るべく候ふ。今の重昌が身にて城を攻め候ひなんに、西國

の諸侯いかゞは下知に從ふべき、おもふにも似ず攻めあぐみて候ひなんには、又一御門の人々かさあらずは宿老の內、重れて追討の御使下され候ふべし。しからば重昌何の面目ありて生きて再び關東に歸るべき。あたら人を士人等に打たせ候ひなん事誠に口惜しくこそ候へ。是れは御家の恥辱とも申すべきをや。御ゆるしを蒙りて候はゞ、追つかけ參りてとかく押へとゞめて、具して歸るべき物をと憚る所なく申しければ、御後悔の色あらはさせ給ひしが、それも叶ひがたくや思し召しけん、夜も更けたりとて入らせ給ひしかば、宗矩も退出し、ひそかに人にかくと語りけりとかや。誠に宗矩が計りし事掌をさすがごとくなりしかば、尤も深計遠慮ありとぞ申すべき。

三九八　板倉重昌肥前國島原の賊追討の事
竝周防守重宗先見の事

島原にて寬永十四年切支丹一揆の時、討手に石川主殿頭忠總板倉內膳正重昌なるべしと云ひけるを、石川聞きて我れ年老いたり。板倉其の器に當れりといはれしが、重昌仰せを承り肥前に赴き城落ちざりしかば、又討手の大將を下さるべしといふを、石川聞きて我れ始は其の選にあはん事をさのみ悅ば

ざりき。今思ふに太平の世に徒らに死なんも志にあらず。あはれ仰を蒙りて西國に赴かばやとぞいはれける。重昌筑紫に向ふ時、京都にて所司代板倉周防守重宗に對面ありて、今度の仰を承る事辱き由を語られけり。重昌既に京都を立つて後ち、重宗重昌が思ふ所を察するに必ず討死すべし。再會是れまでなりといはれけり。松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞きて、重昌城を攻めて討死せられたり。人、重昌に其のいはれをとふ。重宗城に籠る者は百姓の身なる故に、內膳正忽ち攻め落すべしと思へる色あらはれたり。たとひ此の城を攻め落すとも、一揆の奴原さのみ功名ともいふべからず。只今四方無事の時、一揆たのみなき城に籠りて降參するとも悉くうち殺されん事を知つて其の心一和すべし。たやすく落つべからず。日數を經ば又他の大將を指し向けられんに、內膳何ぞ生きて歸るべき。吾れ是を以て討死せん事を知りぬといはれけり。

三九九　川北九大夫肥後國川尻を守る事

細川忠利の士川北九大夫といふ者あり。川尻の代官を勸めよとなりしに、出陣の時供に連れられなば代官の職つとむべしといひければ、尤もとて出陣のとき供すべしと定めらる。天草はやゝもすれば

一揆をなす所と、西國の人のいひける事なれば、心にかけて川尻は海邊船の著く處にて細川家の米藏あり。天草へ海上七里と聞ゆ。川北兼ねて地鐵砲の數をしらべ置けり。（地鐵砲とは亂砲の事也）天草の一揆起ると聞きて、川尻の海岸に一間に一本づつ竹を立てさせ、一本ごとに火繩をゆひ付け、五本に一人の地鐵砲を配りけり。後に天草にて生けどられし者のいひけるは、其の夜川尻の米を取らん爲に船をおし出だして見しに、川尻にいくらともなく鐵砲を備へて見えたる故、さては熊本より軍兵のはや川尻に來れりとて船を戻しけるとなり。川北なかりせば、川尻の米を取られ天草の城たやすく破れまじかりしに、川北が謀にて天草の粮はたやすく盡きてけり。

四〇〇 天草の一揆夜討の事

天草の一揆を圍み攻めらるゝに、城中粮米既に乏しくなれば、夜討して米をとらんと、本田但馬が謀にて、先づ諫早口の塀の外の水を汲ませける時、鐵砲を竝べて寄手に見せたり。かくする事三度に及びて、後には漸々に遲く夜に入りて汲ませけり。是れは夜討に出づる時の鐵砲の火を見咎めさせじとの事なり。其の後毎夜塀裏にて切支丹の唱言、天帝といふ事を數千人一同にとなふ。是れも夜討に出づる時の物音をまぎらはさんとの謀なり。斯くて寬永十五年二月廿一日の夜、五百人を以て黑田忠之の陣所におしよせ、二陣の兵二千人を二手に分かち、繩だすきして額にはくろすを鉢卷にして、相辭は丸か丸と定め、首なとりそ。食物をとり來るを第一の功名にせんと下知し、諫早口より出て、出郭のかたへなる有江口へ退き入るべしと定め、陣屋を燒かん爲に、檜の木を削りかけにして腰にささせ、丑の刻ばかり月もおぼろに暗かりしを便に、黑田の陣所に押し寄せ、同時に鬨の聲をあぐれば、城中にも鬨の聲をあはす。士大將黑田監物しよりぎはにありて、父子共に面もふらず支へ戰ひしが、流れ矢に中りて討死しければ、從兵四十三人枕を並べて討たれけり。一揆大に勇み進みしかども、黑田美作入道睡鷗物しにて、柵際きりの守りかたくためらふ中に、黑田市正高政鎗を提げ出であひ、二三人突き伏せ小姓に首とらせ、市正ここにあり一足も引くな。きたなきふるまひせば、軍神も照覽あれ斬つて捨つるぞと呼ばはる聲を一揆ききて、爰は破りがたしとて、寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行く。三宅藤右衛門支へ戰ひ痛手負ひたり。一揆又鍋島勝重の陣所の井樓に火をかけたりしに、松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介・尼子八郎兵衛・紀州の使者山中作右衛門と打ち連れて來りしが、山中は銀の兜にて十文字の鎗を持ちさんざんに相戰ふ。鍋島の軍兵馳せ集まり入れたてじと防ぎけるに、

竹把に火もえ付きて白日の如く、一揆かなはで引つかへす時、四郎矢倉に在りて勝閧をつくらせ、それより城中靜まりけり。其の後水野日向守勝成島原に著陣し、黑田睡鷗に夜討の有樣語らせ聞きて、むかしより四方を固く取りまかれ、竹把を付け、柵の木二重三重にゆひたる寄手の陣に討つて出でたる事を聞かず、古今無雙の武略をしたる一揆なり。されども一揆を一等超えてはたらかんは、わが士卒なりと云はれたり。

四〇一　鍋島榊原島原城先登の事

同じ城攻に鍋島のしより塀三間ばかりに竹把を付け寄せ、軍兵ひしと押し寄せ居けるに、城中殊の外に靜なれば、ひそかに塀の内をさしのぞき見るに、一揆一人もなし。士大將鍋島安藝是れをきき、塀裏をさしのぞく。其の有樣只今攻め入るべき景色なりしかば、あはやと云ふほどこそあれ、我れ先にとかけ集まる。鍋島の陣に附けられし榊原飛驒守の士ども、竹把を付け習ふとて毎日かはりがはりに來りしが、是れを見ていざといふまゝに押し寄する。榊原の嫡子左衞門佐眞先かけて、乘り入りければ、戶田左門氏鐵の所に諸將集まりて軍評定有りし時なるに、井樓より鍋島の軍兵只今城に攻め入り

候ふと呼ばはる。さらばとて諸將陣を寄せて、攻め落されけり。其の後勝重に今度軍令を背き城攻有りし事を問はるるに、勝重承り、榊原父子先がけして乘り入り候ふうへは、目附を討たせて叶ふまじと、不意に攻め入り候ふと申さる。榊原に問はるるに嫡子にて候ふ。若き奴軍令を忘れ先がけしける故、恩愛にひかれ子を眼前に討たせ候ひては生きがひなし。父子は同罪と存じつゞいて攻め入り候ふと申されければ、鍋島も榊原も門をとぢておし込まれ、三十日過ぎて御ゆるされあり。勝重人にあふごとに、筑紫にて卒忽の城攻せし罪ゆるし給はり忝きよしいはれしかば、江戶にて城攻の卒忽人よとて、勝重の通らるゝを珍しげに覩けるとなり。又榊原申されけるは若き者どもに竹把の付けやう習はせたく候ふ。攻口四五間分ち給はれとなり。皆くるしう候はじと云ひけるに、勝重聞き入れず。わが攻口を人にわくる事やある、一寸も叶ふまじと答へらるるに、榊原しひられしかば飛州の士をわが士共にさし加へられよといはれけり。此の時一丈にてもわけたらば、領地を削らるべき由讒ありけるに、勝重の遠き慮ありし故に、其の事やみたりきと人々いひけりとぞ。

四〇二　黑田勢天草丸を攻め破る事 竝 黑田睡鷗武略の事

黒田忠之天草丸を攻むる時、本田但馬きびしく防ぎ支へて、先陣攻め入り得ざりしかば、忠之素はだかにて進まれけるを、黒田睡鷗物具恃むにたらぬとは申せども、大軍を下知し給ふ身の甲を着ざれば、うろたへたりと人の嘲り候ふべしといひければ、忠之物具とつて肩にかけ兜をば着ず、手ぬぐひにて鉢巻し走り出で、わが士ども年頃吾が家の恩にみちし奴原、けふはいかにして進まざるや、われ此處を一足も引くまじきとて鎗の鐏を地にさしこみ、折りしきすゝめ者共と下知せらる。雨の如く打ち出す鐵砲に打ちすくめられためらへり。睡鷗は是れを餘所に見てひかへ居しかば、忠之何とて一方を下知せざるや、年老いて老耄したるかと大音あげ、齒がみして罵られしかども少しも騷がず、いまだはやく候ふとしづかにいへば、忠之彌〻怒り罵られしを、弟市正彼の入道は物しにて候ふまたせられ候へといふ所に、睡鷗つと立ち上り、麾を取つて懸り候へといふ。詞の下より軍兵一同にどつと進みて、天草丸に乘り入り攻め取つたり。後に忠之睡鷗を近付け、軍兵我が下知を用ゐずして汝が一言にて忽ち城を攻め破りたるはいかなる故ぞと問はれしに、すべて城攻に四方より押し寄せ、先陣ひしと攻めつむる時を見量りて、無二無三に進んで手負ひ死人を顧みず、乘り入り候へば攻め破り候ふ事を得候ふ。四方の味方未だ押し寄せず、一方より攻め破らんといそぎ候へば、城中も外の防をすてて、先づきびしく攻むる方を支へ候ふもの故、外の持口よりも防ぎ甚だつよく候ふ。其のひまに一方より攻め入り候ふ時は容易く撃ち破り候ふ。早過ぎたる方は却つて手後する事常の理に候ふ。臣こゝこのわきまへしりてしづまらせ候へと申せども、殿いそがせられ候ふ故、味方に手負討死多かりきと申しければ、忠之高政ともに大いに感ぜられけり。

四〇三　水野勝重父子有馬永純本丸一番乘を論ぜられし事

島原を攻め落す時、水野美作守勝重は江戸にて賜はりたる白川月毛といふたくましき馬に乘り、戸田氏鐵の陣所よりわが陣所に乘り切つて歸られしに、勝重の軍兵ども金の束のしの馬じるしを見るより、我れ先にといさみけるを、勝重馬上にて兜を取つて著、武者奉行河村新入・士大將上田玄蕃に向ひ、わが下知なき以前にかゝるならば、軍神にかけて斬り棄てよと大音あげて呼ばはり、麾を拔き出だし軍兵をすゝめ、塀を破りをめきさけんで攻め入りけるに、自分馬より鎗を杖にして本丸を目がけて進まるる。嫡子伊織十四歲眞先にかけ出づるを、祖父の勝成後陣より見て、本丸をうち破れと下知せらる。本丸にたて籠るもの共數千人、けふを限りと思ひ定め防ぎ戰ひければ、討たるる者多し。鍋島

の軍兵ひろみて見えし處を、水野父子横さまに面もふらず切りかゝりて、三の丸より本丸へ逃げ入る一揆を討ち取る事數をしらず。本丸の石壁より打ち出だす鐵砲の玉霰の飛びちるが如し。石壁は五間七間計も高く登り兼ねたる處に、水野父子大音あげて今日本丸を攻めとらずは生きて誰れにか面を向くべき、死れや死れやと聲々に呼ばはりうてども射れどもひるまず、われ先にと攻めかゝる。旗奉行神谷杢之允旗十本の内一本持たせ來りて自ら竿に手をかけ、本丸に入らんとす。纏奉行進藤七兵衛・小野田正太夫・金の束のしの馬印をふりかたげ來りて、松の丸に押し立てしかば、神谷も旗を入る。水野父子の兵念なく石壁を登り本丸に攻め入りたるを、勝成二の丸より見やりて、われ今生の思ひ出なり。美作は大阪にて武功あり、伊織はけふを始めの軍なるに、本丸を攻め取りし事家の面目なりとよろこばれたり。有馬左衞門佐康純の嫡子藏人永純は寺澤忠高の後陣なりしが、唯一人從者に鎗をもたせ、寺澤の先陣をかけぬけて、天草丸の方へはせ入り、本丸に進んで五六間ばかりの石壁を登り、今日本丸の一番乘有馬藏人なり、心ある士はよく見候へと呼ばはる處に、勝重の士鈴木牛之丞取りたる首を、石垣の上に置きて息を繼ぎ居けるが、此の聲を聞きて鎗を横たへ藏人に向ひ、只今ここに來り一番とは何事ぞや。本丸は水野美作守攻め入り旗馬印入れ置きぬ。二番とならば是れへ上らせ候へ

といふ。藏人聞き入れられずは唯一鎗にと思へる異色なる上に、水野の旗、本丸に建てしを見て、さらば美作守につゞきては藏人なりといはれしかば、其の時鈴木牛之丞美作守父子の外大將たちはいまだ本丸には見えず、まぎれなき二番にて候ふとて、手を取つて石壁に引き上ぐるに、永純つめの丸くひ違ひの處に進み行き美作守はいづくにやと問ふ。神谷美作守は腰郭の上に居て、爰に旗を入れ候ふと答ふ。永純聞きてさては美作守は我れより後にてこそあれといはれたり。永純本丸に押し入りたりと勝重聞きて使をたて、只今攻め入られしよしくろわ在る所にあり、もし夜に入りて一揆打つて出づる事もあるべし、爰に一所にありて下知せられ候へとなり。藏人聞きもあへず、作州はわれより後に攻め入られよ。藏人は一寸も敵近き所を好み候ふほどに後へは引き候はじ。一揆打つて出づるとも藏人爰にあらば危き事候はずと答へられけり。勝重よしよし詰の丸より切つて出でば敗北すべしとて、士三十人計鎗を横たへ鐵砲を前に並べたり。藏人は鐵の楯を取り寄せ前に押し立て、夜の明くるまで待ちかけられしかども、一揆打つて出でず。信綱下知して勝重も鍋島の陣に入り代られしかども、永純はしりぞかず。使度々に及びて引きかへされけり。落城の後三月朔日永純勝重の陣所に行き本丸の一番は藏人にて候ふといふ。勝重年若くて然の給ふ。本丸の奴原命を限りに防ぎ候ひしを、美作父子おし

寄せ打ち破りて、旗を一番に入れし事誰れかあらそひ申すべきと答ふ。鈴木も進み出でたれば、永純また鈴木が申し旨もいかで忘れ候ふべき。作州父子は一番と思ひて、蔵人二番と申しも分明なり、されども旗入れ置かれし所に行きて見しに、夫れより遙の跡に控へてこそおはしたれ。鈴木も旗を置にして利口を申したれ。とかくに一番は蔵人に候ふと云はれければ、勝重陣所に在りたればとて旗を一番に入れしは、是れ軍の法に於て誰れかは一二を論ずべき。父子が兵ども身を棄てて力攻に乗り取りし本丸を、他の一番に定めん事思ひも寄り候はず。能く思慮し給へと答へられしに、永純旗の前後は論ぜず候ふ。將たるものの先がけは蔵人が外誰れか候ふ。作州は跡より使を給はり候へば、一番は蔵人なりと怒られしかば、勝重只今のあらそひ無益の事に候ふ。軍に慣れたる物しに問ひて一二を定められしかば、永純打ちとけて小姓を呼び、茶を飲みて出でられしが鈴木に向ひ、いかにも調和らかに云ひて歸られしかば、蔵人もなみなみならぬ人なりと譽めあへり。

四〇四　陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事

一揆の長、四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取りけり。二の丸にて鐵砲に當り倒れし者の首を斬

りしに、忠利前髮ある首をえり出ださせ、鞭にて彼の首をさし、四郎が首ともおぼしきに、誰れか見知りたると問ふ。須佐美權之允四年以前に四郎を召しつかひし事の候ふ。紛なき四郎なり。左の耳の下に瘤の候ふ。是れ其のしるしなりとて生け捕りたる四郎が母に見すれば、吾が子なりとて泣き倒れしかば、忠利使をたてて首を石谷十藏の方に送られけり。後、陣に千石の祿を與へらる。

四〇五　松野龜右衛門鉄砲修練の事
附松野才覺の事

島原の城攻に、細川家の士大將松野龜右衛門井樓より見るに、本丸と二の郭の間に坂ありて人集まる中に、大紋の羽織著たる者あり。松野指ざして鐵砲にて打ちたるに、五町ばかりにてたゞ中にあたりてけり。それより空箭なく打ちしかば、彼の坂を夫れより後たまたま通る者、身をかゞめ走り通りけるとぞ。松野は鐵砲の妙手留利刑部一火に學びて妙を得たり。

〔熊本にて一匁の筒をみがき居しに、庭の南天蜀の實をひよ鳥の來て喰ひけるをかなものしはめて藥をこめ、目的を見ず箸にて火をさして打つに中らざる事なし。島原の前の事なりしにや、細川

家の長臣南條大膳根をふくむ。故ありて細川家を傾けん事を謀りけるに、其の比深く密にする事ありて、泄れなば細川家の禍なる事を知りたりければ、先づ切支丹の事訴へけり。江戸より南條をめす。細川家驚きたれどもせん方なし。松野我れにまかせられよとて、囚人なれば厚き板にて詰牢をつくり、醫者一人に密謀を云ひふくめ、熊本より出づるに天氣を待つとて處々に舟をとゞめ日を經る內に、人參の入りたる藥を與へ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり。南條は氣の鬱したる上人參數百斤飲みたりしかば、心狂亂したりけり。松野江戸に打ち具し至りて、南條は數年狂氣の者にて候ふとて出だしけり。切支丹訟の事を問はるるに狂言のみなり。とく熊本に歸すべしとて松野に返されぬ。此の謀たゞ醫一人のみ知りたりと云へり。」

四〇六　藤堂高虎阿野津にて勢揃せられし事

元和五年藤堂高虎領國阿濃津にて俄に勢揃をせられけり。人或は怪しみ、或は高虎何事に謀反すべきや。萬に一も反心あらば事を密にすべきに、あらはに人のおどろくべきやうになしたるは仔細あらんといひしに、福島左衛門大夫領國を削られけり。

四〇七　福島正則領國を召し放さるる始末の事

福島左衛門大夫正則は關ヶ原の軍功によりて、尾張の淸洲より安藝備後を賜はりけるが、物毎く政惡しきのみならず多く無罪人を殺し、且つ東照宮に對し奉り無禮多かりければ、元和五年台德院殿御上京の時領國を削られけり。

「本多上野介正純に就きて、廣島の城池を浚ふべき旨を申す。申し上ぐべきよしを答へられしが、御上京の事繁きにまぎれて其の事なかりしに、廣島の城普請の事を聞し召し怒らせ給ひしに、正純其の時驚きて正則の書翰を出だされしに、證文の出し後れとて聞し召し入れられずといへり。」

二條の城にて土井大炊頭利勝・藤堂和泉守高虎をめして、此の事を仰せ出だされ議決せり。

「板倉伊賀守勝重此の事は井伊掃部頭直孝に仰せ聞けられよとて直孝を召す。御前に參りて、福島左衛門大夫國を召し放たるべき事故召され候ふやと申す。其の事なり。誰れか使にせんと思ふぞと仰あり。直孝京都よりの御使ならば、江戸に殘れる者是れ程の事辨へざるやと申す事も候ふべし。只今江戸に罷りある者に仰せ出だされ然るべし。又正則を京に召され罪の趣仰せ出だされ申

譯あるか、又は國に引き籠り思慮せよと仰せられ候うても然るべく候ふ。事により直孝馳り向ひ打ち破り申すべしと申す。和泉守若き掃部頭には似合ひたり。但し福島もさすがの者にて剛の者餘多あれは、小路軍になりていかにあらんと申す。直孝和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや。直孝が家には武功の老武者多し、古き戰の事を聞きしに、今川氏眞の許にて、濱松の城主井伊隼人を氏眞の城下に召し寄せ誅せられし時、小路軍になりて殊の外むづかしかりきといふ。唯一事を聞きたりと云へば和泉守詞なし。台德院殿いはれざる小路軍の論ぞとて、先づ退出せられしが、井上主計頭を以て再び直孝を召し仰には、わが思ひたる所も汝が言の如し。人々皆口々にいひて一同せず。掃部が存ずる旨に從ふべし。さて誰れをか使にせんと仰せなりしに、直孝斯様の使久世三四郎・坂部三十郎兩人よかりなんと存ずるなりと申せば、是れも符合せりとの仰にて兩人使たり。かくて酒井雅樂頭唯世太田善太夫を近付け、福島左衛門大夫領國を召し放たるべきよし仰せ出だされたり。福島はさるものなり、いかなる事をか仕出すべきと危く思ふなりと語られければ、太田いや何事か致すべきと事もなげにいふ。酒井又いつものわうちやくなる詞かな。危き事と思ふなりと申されければ、太田ならざる事する福島にあらず候ふ。すべきをしらざる者こそさは

候ふべけれ。福島は非道不仁の男なれども、勝負の理をよくしりて候ふ男なれば、何事も仕出ださじといひしが、果して一言にも及ばず仰の旨を承りたりき。」

六月に福島領國を削らるる旨廣島へ聞えければ、福島丹波諸士を皆呼び集め、預け置かれたる城なれば、公方の仰なりとも渡し難し。又備後守殿の爲なれば渡すべきかと評論す。上月文右衛門進み出でて、人はいかにもあれ我れは本丸を預かりぬる上は命あらん限は人に渡すべからずと申し切つたり。丹波心得ざる氣色なり。村上彦右衛門聞きて福島・上月兩人の思ふ所に、同心の面々別々に判形せられよとて二通書きて指し出だす。酒井主膳とて丹波が從子なるが、座を立ち鎌田主殿を呼び、いかにおもふぞ。丹波は伯父なれども上月がいふ所尤もなりといへば、主殿も上月に同心して、判形をしたりければ皆是れに同心しけり。其の時上月人々皆かくの如くなれば、丹波が妻子を本丸に入らるべきやといへば、丹波即ち妻子を本丸へ入る。それよりわれ先にと妻子をこめけり。城を受け取るべき爲に諸將うち向はれしかば、丹波、吉村又右衛門・水野治郎右衛門二人を使として、左衛門太夫領國召し放たれ候ふにより、仰の旨は謹んで承り候ふ。然れども主君預け置かれし城を、證據とすべき書簡なくて渡さん事は、人々の存ずる處思ひやられ候ふ。次に領國に入り給はん事、ゐなかの若き奴原無禮の恐

れ有り。領國などとさけられ候へと申し送る。さらば左衞門大夫は程遠し。伏見にある備後守の書簡を證據にせんやと云はせらるるに、父子たる事は論なしといへども。備後守が領國にも城にもあらず。備後守が言は用ゐるにたらずといふ所に、正則が書簡來りしかば、城門の大手にて書簡を受け取りぬ。さて廣島は船入二所あり。人多くさわがしくて、士どもの妻子退き去る時爭ひあるやの恐れも候ふとて、一方をば人をとゞめ一方の口より退散す。城中の士は門の左に付き、禮服して並び居、城受取の使安藤對馬守重信は城門の右にそひて城に入られけり。

〔安藤城門に入る時、並び居たりし人々に向ひ、左衞門殿事申すべきやうもなしと詞をかけらる。其の時皆禮せしに、獨り茶筅髮にてしかみの撞木杖をつきて對馬守の詞を聞き、かたはらを見て禮しけるを、山崎甲斐守見て、なみなみならぬ人なりと知りて姓名を問ふに、長尾出羽と答ふ。山崎退散の後家族を養ふべし、又他國に行く中寓居せられよとて、使をもて云はせられしに、出羽甲州の御事は承り及びたり、忝き旨を謝す。やがて森美作守忠政禮を厚うして招かれしかば、森家に仕へけるとなり。〕

丹波と文右衞門とは密に相謀りて、初よりたて籠るべきといひて、同心する人なき時は、別にすべ

き道なき故に、事を二ッにして士の心を試みたるなりと、其の比いひあへり。さて後城を守るに決せし時、丹波上月に向つて吾れと文右衞門腹切つたらば何事も外にすべき事なしといひきとかや。

〔左衞門太夫罪せらるると聞きて、暇を乞ひたる士三十人ばかりありしかば、狹間くゞりといはれけり。妻子を本丸へ入れたるは諸ごもりと名付け、妻子を城外に出だし其の身のみ城を守らんといひしに片籠りといふ。後に京都耳塚に札を立て、三色に分ちて姓名を書きて世の人に見せしゆゑ、さまくゞりの面々は饑死に及びぬといへり。上月は祿五千石士大將たり。正則上月が志を感賞し書簡をあたへらる。今度我等事御預に成り候ふ。是れに依りて城を枕と存じ候ふよし、心底察し入り候ふ。然れども存寄有レ之候ふ間早々城相渡し可レ申候ふ。貴殿志之段不レ淺過分之至に存じ候ふとぞ書かれける。大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり。同じ時大崎は備後鞆の城に在り。秋田も下總も同じく鞆に在りしが、大崎を廣島にやりて己れ一人にて鞆を守り、討死して名を揚げばやと思ひけん大崎に向ひ、江戸より城を受け取るべき使近き内に着陣あるべし、とく廣島に籠られ然るべからんと云ふ。大崎聞きて殿の下知なくて城を出でんこと思ひもよらずといふ。秋田城中を廻り防戰の支度專らなりしに、大崎は柱によりて眠る外なし。人々大崎をそしりたるに、大

崎あざ笑ひ、秋田はかくゆゝしく防戰の用意するなるべし。われは思ひ定めたる事ありて萬事暇なりといへば、其の仔細を問ふに、大崎此の城を守り日本國を敵になし萬に一つも勝べきや。あたら人々を徒に殺さんもいかがなり。われ一人大手の門外へ出でて、城代大崎玄蕃と申す者なりとて腹切らん後城を受け取り給へ。城の人々殘らず助けられよと云うて、各々たちの命に換はるべし。何の用意の有るべきといひけり。かゝる所に正則の證書來り、事故なく城を渡ししかば、大崎と村上彥右衞門・眞鍋五郎右衞門と同じく紀伊の家に仕へけり。大崎は若き時木村常陸介に奉公し、後正則に仕ふ。鬼玄蕃といはれしものなり。關ヶ原の時尾州淸洲の城に大崎を置かれけり。石田三成大垣の城に入りて使を以て、福島家は大閤の恩篤き人なれば、今度無二の味方に思ふ。淸洲を明けられよ兵を入れなんとぞたばかりける。津田備中繁元はげにもとおもひて同心すべきに、長行事はいかにもせよ殿の仰なくて他國の兵を城に入れん事、存じもより候はず。しひて兵を寄せられば一戰せんと目を見出だして、使を罵り追つ返しけり。かくて大崎門々を固く守りさまくばりして、かくと小山に告げたりしかば、正則悅ばる。東照宮正則に淸洲の守に離れか有ると仰あり。正則大崎玄蕃を留め置きて候ふと申す處に、斯くと告げ來りしかば聞し召し、

大崎は世に響有る者なり。さぞあらんと仰せられしが、其の後も淸洲を敵にとられざりしは、大崎が功なりと度々仰せありきとなり。紀州にて安藤帶刀・大崎・村上・眞鍋に逢ひて武功を問ひたりしに、眞鍋は十四の時より軍をし、數度の功名をかたり、村上も十四竹子の軍より壬生川の先驅等をいひしに、大崎はわれ木村が許に小祿にて有りしが士大將になり、又福島の家にても度々下知し候へば、然のみにぶうも候はずといへば、帶刀大に感じけるとなり。又一說に、福島正則流罪藝州へ聞えければ、長臣の者ども福島丹波がもとに相集まり、城を渡すべきや否やを論ず。村上彥右衞門通淸殿流罪たりとも、御存生においては御判形を見て國を引き渡すべし。御判形來らずば此の城を枕にして討死の外他事なし。但し本丸は上月文右衞門預りたれば、上月に談合然るべしといふ。上月聞きて御判形を見ずして、爭でか本丸を渡すべきといふ。備後三次に尾關石見、備中境東條に長尾隼人一勝、備後三原に大崎玄蕃長行ありしが、石見隼人をつぼませ廣島三原の兩城を守り、各々人質を城に入れ、天守に燒草を積み、大手搦手の持口を定めたり。安藤對馬守・永井右近大夫中國・西國の軍兵を率ゐ、備中の笠岡に著陣あり。丹波吉村又右衞門・大橋茂右衞門を使として、主君の判形を見ずして城を渡すこと迷惑なりと、竹中采女へいひ送れり。上使

開きて狀を取り寄すべしと返答ありて笠岡に滯留の所、正則の狀到來す。丹波已下是れを見て城を渡すべしと相定む。笠岡より尾道へ八里、初は陸路と定められしを、安藤船にて行くべしとなり。加藤嘉明聞きて、上使は船にて早く總人數は陸にて遲からん。上使より遲くばわれらは男をすてなん。是非陸をとすゝめらるれども安藤聞き入れず、船の事を蜂須賀阿波守に相計らる。加藤も船を用意したり。せめて某の船に乘られよとすゝめ、此の船に乘りて上使尾道に到り、人數は陸を廻りけり。大崎玄蕃使を以て主君の狀廣島に來る上は三原も相違候ふまじ。然れども三原へ狀來らずして、城は明け渡し難しと竹中のもとに云ひ送る。安藤聞きて後先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乘り入り、上使討死の時爰に有り、城の門際にて上使討死せば、續く者なしといふ事有るべからず。只今まで笠岡に滯留し、又爰に日數を送るべきにあらずと云ひ切りたれば、加藤尤も然るべしとて、子息式部少輔の先陣をはや押し出ださんとする處に、三原の城へもはや正則の狀來りければ、玄蕃事故なく城を渡したり。城に入りて見れば士足輕の名を書き付けてさまごとに配り置き、場の隅々まで掃除して、座敷には釜に湯を沸かし、茶をひかせ置きたり。翌日廣島に著きければ、丹波今日渡すべきに場中掃除未だ終はらず。下々の荷物ものけ兼ねたり。

明日までまたれなんやといふ。永井聞きて我れかれて聞きつる事あり。城和平になり渡すに及びて、下人の荷物を片付け兼ねたり。一兩日またれよといひしを、荷物は札を附けて、大手搦手共の手より出ださるべし。相當のあたひに買ひ取らんとて城を受け取りたりし。其の翌日寄手の大將頓死しぬ。城中のいひにまかせば、城を持ちかへす變も計りがたし。危き事なりといひ傳へたり。唯一刻も早く受け取らんとて、大手へ進み行きて繪圖を披き、城内の物主共を呼び集め、番所寄口を渡し濟み、城へ入りて飛脚をもて此の旨言上ありけるとなり。古き人の詞に、城の受け取り渡しは互に證據をとり、唯今事に臨むが如く心得べし。城主進退窮まりたるなれば愼むべきなりといへり。」

新訂 常山紀談 中卷終

明治四十四年十一月十二日印刷
明治四十四年十一月十五日發行

學生文庫第十六編

不許複製

常山紀談中

定價金三十錢

校訂者　大町桂月

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地　加島虎吉

印刷者　東京市京橋區日吉町十番地　渡邊爲藏

發兌
東京市日本橋區本石町三丁目　電話本局三六六番二一六七番　振替貯金口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區住吉町二番地　電話浪花五八四九番　振替口座東京一九八四二番　至誠堂小賣部

印刷所　民友社

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍總クロース　舶來上等紙刷　特製美本
全部壹百冊　定價各冊金三拾錢　郵稅各四錢

※選擇至善、校訂嚴密、內容豐富、裝幀優良、印刷鮮明、携帶至便、周到卓拔なる批評的解題は各書の性質綱要價値を詳說す

既刊書目

1	南朝史傳	全
2	日本外史	上
3	益軒十訓	上
4	謠山全集	上
5	曾我物語	全
6	西遊記	上
7	源平盛衰記	壹
8	太平記	壹
9	心學道話	全
10	常山紀談	上
11	日本外史	中
12	益軒十訓	中
13	先哲叢談	全
14	義經記	全
15	一休諸國物語	
16	常山紀談	中
17	益軒十訓	下
18	源平盛衰記	貳
19	西遊記	下
20	謠山全集	中

近刊書目

平家物語	上
禪學名著集	全
續心學道話	全
大岡政談	上
淨瑠璃傑作集	
川柳名句集	全
武士道叢書	全
繪本太閤記	壹
狂言記	全
鶉衣	全

※學生及び讀書家一般の讀物として史傳地理教訓文藝隨筆等の古典的名著を網羅して多趣多益なる良書を續々發刊す

發兌　東京市本石町　至誠堂　振替東京一七四四

新譯漢文叢書第一編　大町桂月先生譯評

○新譯 日本外史

袖珍天金箱入特製　紙數壹千貳百頁　特價金壹圓貳拾錢　小包料金八錢

本書は近世の偉人絕代の文豪賴山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の發恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敍事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふること數百條山陽が常時々憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を協む觀殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歷史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閑却して自ら寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編　友田宜剛先生評解

○新譯評解 文章軌範

袖珍天金箱入特製　紙數壹千壹百頁　正價金壹圓拾錢　小包料金八錢

◉東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本文に譯し（本文悉くゴジック五號活字を用ふ）更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文の構造法を說明し上欄に原漢文を揭げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本文を習ふものゝ研究書となれり著者は文章教授上に一見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

新譯漢文叢書第三編　濱野知三郎先生評解

○新譯 孟子（附索引）

袖珍天金箱入特製　正價金九拾錢
紙數八百頁　郵稅金八錢

◎讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切なもの……此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編　大町桂月先生譯評

○新譯 日本樂府

袖珍天金箱入特製　正價金五拾錢
紙數三百五十頁　郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ今又賴山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず之を釋し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨步せる賴翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歷史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起たん

新譯漢文叢書第五編　大町桂月先生譯評

○新譯 日本政記

袖珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數六百廿餘頁　郵稅金八錢

賴山陽前に日本外史を著して武門の興廢を說き、後に日本政記を著はして朝廷施政の大綱を明にせり。先頃喧騷を極めたる南北朝問題の如きも、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至るまで手删して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大、文章雄健、光銳陸離として、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生茲に之を譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる評を隨所に加へて筆力縱横、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編　久保天隨先生譯評

○新譯 十八史略

袖珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數七百頁　郵稅金八錢

上下四千餘年、興亡八十餘朝、支那歷史の殆んど全體は、十八史略の一書に因りて、その大概を領知すべし。加ふるに、この書は、譯者が特に意を用ゐしものにして、妥當穩健、復た一字一句も苟もせず。卷中に挿入せし數百條の評語も悉く奇警峭拔、言外の微旨を闡明して、剩すところなし。敢て江湖の一讀を勸む。

新譯漢文叢書第七編　友田宜剛先生評解　全七冊縮刷全壹册

○新譯評解 續文章軌範

袖珍天金總クロース特製紙數壹千頁　正價金壹圓 郵税金八錢

續文章軌範は正文章軌範と並んで作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文陸離として光彩を放てり文に志す者は必ず之を坐右に致して日夕に師とし友とすべし本書は作文教授の泰斗友田先生が刻苦研鑽多年の螢雪を積んで之を完全なる明治の作文模範化せられたるもの其異彩特に正篇と相同じく作者略傳、解題、大意、語釋文法、通解、總評、新式活字ゴシックの譯文、上欄の原文何れも燦然として光を發ち、正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し冀はくは江湖の諸彦一書を坐右に備へよ

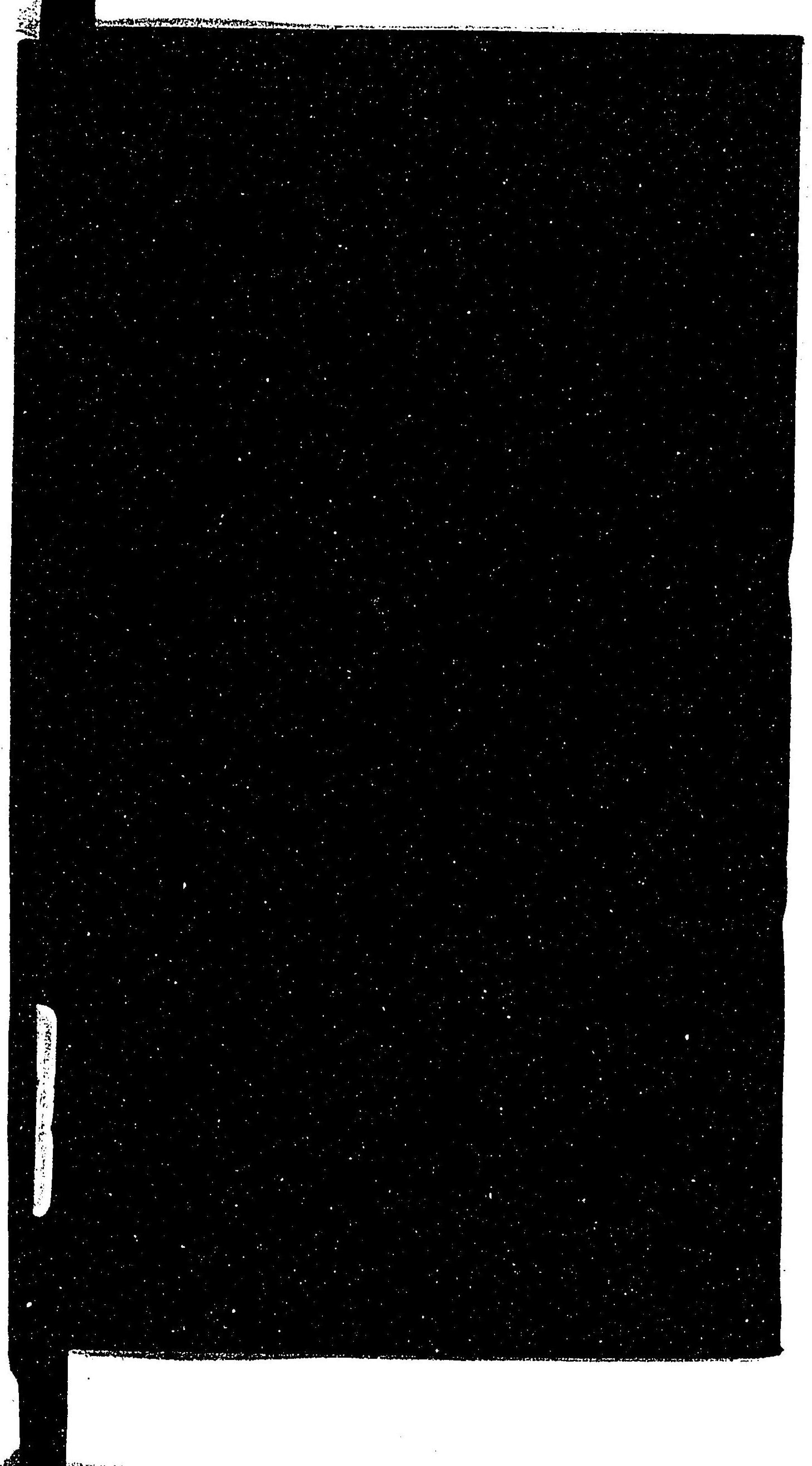
新譯漢文叢書第八編　大町桂月先生譯評　全五冊縮刷全壹册

○新譯 國史略

袖珍天金總クロース特製　目下印刷中

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年の金甌無闕の歴史の貴賓なるを知らず人心輕佻となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとするは今の世の大患なり世の歴史教科書は唯歴史の骨組のみありて肉なく血なし歴史教育の宜しきを得ざること其大原因ならずんばあらず大町桂月先生玆に慨する所あり先に日本外史日本政記日本樂府を譯され今又國史略を譯さる國史略は古來の諸國史の粹を拔き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を開闢に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戸々に誦せられたるにも係らず漢學教育衰へし現今に際し此名著も空しく吾人の念頭より閑却されんとする時に當り現代の文豪大町桂月先生之を譯し之を解し更に適切なる批評を加へて有益なる貴重なる國史略玆に復活す

~~319~~
266
655



~~320~~
206
655